

学びの場としての小豆島遍路

大賀睦夫研究室¹

はじめに

2009 年度、香川大学経済学部大賀研究室は、「観光の視点で見る小豆島遍路」のテーマのもと、実際に小豆島を歩いてお遍路の魅力を発見することを一年間の課題とした。

近年、自分自身を見つめなおしたい、自分の生き方を考えたいといった動機でお遍路をする人たちが増えている。これを哲学的遍路と呼ぶ人もあるが、われわれは「宗教とはいえないがスピリチュアルな価値を求める旅」という意味で、スピリチュアル・ツーリズムと呼んでみた。そのような視点から、お遍路の魅力、お遍路の現代的意義を考えてみようとしたわけである。

歩く場所を四国ではなく小豆島にしたのは、小豆島遍路が本格的遍路でありながら、約一週間で全体を回れるということと、なにより学生諸君の巡拝中の交通安全を考えてのことであった。四国遍路は交通量の多い一般国道を歩くことが多いので集団で歩くと危険度が高い。スケールの大きさはもちろん比較にならないが、どちらが自然がより多く残っているかといえば、小豆島であろう。小豆島遍路にはそういう魅力もある。

この一年間で小豆島を歩いて一周する予定であったが、実際に歩けたのは、小豆島全体 8 コースの内の 6 コース、つまり 4 分の 3 であった。それとは別に一日バス遍路を体験した。これは歩き遍路とバス遍路を体験して比較するためである。研究室での授業では、お遍路の概説書を学んだり、出版されているお遍路体験記を読むなどの勉強をしてきた。

本稿は、そのような大賀研究室のこの一年間の活動のエッセンスを二部構成のレポートにまとめたものである。第一部は、教員（大賀）による若者に向けたお遍路紹介の文章である。お遍路は古くて新しい。お遍路は現代人のニーズに応えているからこそ、ブームと言われる現象が起きている。そこに注目して「お遍路の現代性」というタイトルにした。

第二部はゼミ生による小豆島遍路体験記である。小豆島遍路の特徴などをゼミ生で分担執筆した後、ゼミ生全員のお遍路体験記が収録されている。お遍路においても高齢化の波がおしよせているのが小豆島である。お遍路は若者にもっと受け入れられてもよいのではないだろうか。そのためには何が必要だろうか。そのようなことを考える上で、若者が小豆島遍路をどう経験したかという報告は、それ自体資料としての価値が大いにあるように思われる。

（大賀睦夫（香川大学経済学部教授））

¹ 2009 年度の大賀ゼミの「観光の視点で見る小豆島遍路」プロジェクトに参加した学生は次の 11 名である。岡田佳奈、北出聖治、久保由希乃、武市佳久、津田裕太、徳島也、西山優樹、野口浩輝、浜西実咲、水野晃浩、宮内崇匡。

第一部：お遍路の現代性

1. お遍路は学びの場

お遍路は「お四国病院」といわれる。あるいは「お四国大学」と言われたりする。²それだけお遍路には人を癒す力があるということであり、またお遍路から学びうるものがあるということである。お遍路を病院にたとえるなら、そこにはどんな診療科目があるのかと問うことができよう。お遍路が大学なら、どんなカリキュラムがあるのかと問を発することもできよう。それに対して解答を与えることが、すなわちお遍路の魅力と現代性について語ることになるであろう。以下では、お遍路は現代社会のどのような課題に応えるのか、われわれはお遍路を通してどんなことを学びうるのかということを具体的に示してみたいと思う。

なおこの第一部の文章は、香川大学経済学部ツーリズム研究会『地域と観光』に収録した拙稿「お遍路の現代性」を本報告書の学生諸君の文章とのバランスを考え、適宜簡略化して再録したものである。より詳しい内容はそちらをご覧ください。

2. 空海思想を学ぶ

お遍路を通して学ぶことの筆頭に、「空海思想を学ぶ」をあげるべきであろう。お遍路は弘法大師空海のゆかりの地を訪ね歩く旅である。「同行二人」といわれるが、それは巡拝中、常に弘法大師とともにあるという意味である。お遍路は必然的に空海の生涯と思想について学ぶことにつながってくる。そしてしばしば、空海思想には現代的意義があると言われる。それはどういうことであろうか。

空海研究の大家、宮坂宥勝氏は、「現在、弘法大師空海の実在は確実に時代の脚光を浴びつつある」と言う。³ 19 世紀以来の科学万能主義の思潮に対して、科学技術の限界を覚醒させ、人間理性の増上慢を戒めるのが空海密教だと宮坂氏は言うのである。

総本山金剛峰寺座主、松長有慶氏も、自我を中心として対立的に世界をみる近代思想から、宇宙的視座をもって全体的、相互関連的に世界を見る密教の立場への転換を唱えている。このように、宮坂、松長両氏とも近代思想を批判的に考察する上で空海思想が有効だと考えている。

両者は、空海思想の現代性について総論的な紹介を行っているだけであるが、最近、空海思想の現代性について詳細に論じた書物が刊行された。村上保壽『現代社会を弘法大師の思想で読み解く』2008 である。この書物は、西洋哲学の方法論で空海思想にアプローチしているところにその特徴がある。

村上氏は、20 世紀の西洋哲学思想は人間の自己疎外を問題にしたが、人間の実践的なありべきあり方を開示しえなかったと批判する。なぜ開示しえなかったか。「それは、彼らが

² 「お四国大学」「お四国病院」は辰野和男氏が紹介していることばである。辰野（2001）、146、196 ページ参照。

³ 宮坂（2003）、9 ページ。

人間存在の『その存在』にこだわったからではないか」という。⁴人間のあるべきあり方は、人間を含めた一切の存在者の存在の事実性からのみ告げられるのであり、決して人間存在の事実性のみから明らかになるものではない。そのことに気づいていたのが、釈尊の仏教であり、弘法大師の密教思想である。弘法大師の思想の特徴は、人間の存在を人間の主観的な視点や主体性からではなく、そのような視点や主体性を離れた視座から捉えているところにあるという。以下、村上氏の書物に拠りながら弘法大師の現代的思想性について紹介してみたい。

村上氏は弘法大師の存在論を次のようにまとめている。現代人は主体と客体という二つに分断された存在のあり方に慣れ親しんでいる。私が犬を知るとき、知る私の意識と知られる犬は異なった存在次元にいる。そこには二分された存在のあり方がある。しかし、それは存在の本来のあり方ではない。弘法大師によると「精神と物質、心と体が主客に分裂することなく一体として存在しているあり方がすべての存在者の本体的（本源的）なあり方・存在の実相である」。⁵「即身すなわち存在者の本源的なあり方とは一つの全体的秩序の中で互いに関係しあって存在している。・・・ネットワークつまり一つの全体的秩序から切り離された、あるいはいかなる関係性も有しない個のあり方は、本源的なあり方ではない」。

6

そして、その存在の関係性は具体的には「互為依正（ごいえしょう）」の構造をもった関係性であるという。「（互為依正の関係とは）人間が主人となって自然を支配していると同時に、自然が主人となって人間を支配しているという相互的な制約と依存の関係」である。⁷人間と自然との共存といっても、決して人間中心の共存ではないのである。

弘法大師はまた「六塵悉く文字なり」という。大自然の一切の現象が文字であるという意味である。「この大自然あるいは現象世界の一切のモノが実相を明らかにする『ことば』を語っています。・・・この真言ともいえる『ことば』の特徴は、人間の主観的な認識の言葉ではなく、人間を含めた存在そのものの言葉であるということです。それ故に、われわれはこの『ことば』によってはじめて存在そのものを把握（直感）し、それ自体と同化一体となることができるのです」。⁸

かなり難解な表現と感じられるかもしれないが、要するに、空海の思想の現代性についていうと、紛争の続く国際社会、危機的状況にある地球環境など、現代の地球規模の諸問題を解決に導く鍵が、弘法大師空海の思想の中にあるということである。一言でいうと、それは人間の視点、人間中心の見方を離れよということである。

われわれがお遍路をして、一木一草にも自分と同じいのちを感じるとき、空を見上げて天の高みは精神の高みだと感じるとき、存在するものすべてに感謝という気持ちがわきお

⁴ 村上（2008）、10 ページ。

⁵ 同上、16 ページ。

⁶ 同上、22 ページ。

⁷ 同上、26 ページ。

⁸ 同上、30 ページ。

こってくるとき、われわれは空海の実践していることになるであろう。

3. 身体論を学ぶ

お遍路から学ぶことの第二は身体論である。お遍路ではひたすら歩く。短い距離であれば歩くことは楽しいが、延々と歩くのはつらい。疲れるし、体のあちこちが痛み始める。それでも歩く。そこに何の意味があるのかと考え始める。そして歩くという身体運動が精神に及ぼす影響に気づくことになる。がまんして歩くことが精神の向上にもつながるのだと。このようにして、身体論はお遍路にとって身近なものになる。

歩くことで四国の人たちとの交流も起こりうる。自然との一体感を味わえる。無我の境地にも入れるというものだ。また、歩かなければお遍路における修行という性格はきわめて希薄なものになってしまうであろう。毎日長い距離を歩くという行を課すことによって、体も心も鍛えられる。実際に歩き遍路を体験すると「心身一如」を実感する。体を動かすことで心の癒しがあるという不思議さに心打たれるのである。これこそ現代人が取り戻すべきテーマではないだろうか。

お遍路に限らず、昔の人は長距離をよく歩いた。それは現代人の生活から失われた習慣であり文化である。現在では、生活習慣病の一因にあげられるほど、われわれは運動不足に陥っている。現代の日本人は「足腰が弱くなり、からだの中心軸が失われてきつつある」といわれる。⁹フーコーを引用するまでもなく、われわれの身体は時代のシステムの所産であることは明らかである。現代人の身体は、自然から切り離され生命力を失っていると言わざるをえない。

心身一如、心と体がひとつとは、われわれがお遍路から学ぶことであるが、それは現代日本人が見失っている考え方であり、再発見しなくてはならない思想なのである。なぜなら心と体は別物という考えが近現代の原理になっているからである。哲学者の黒崎政男氏は、彼自身、いまは陽性で元気でポジティブな人間になったが、以前はシニカルで暗くてネガティブな人間だったという。そして「気分が暗いというのは、最初は頭脳の問題だと思っていた。世の中にはネガティブなことがいろいろと充満しているので暗い、考えすぎるから暗いと思っていたのだが、そうではなくて、それは身体が生き生きしていないときに暗いのである。身体が生き生きして健康な状態にいと、状態は悪くてもなにか明るいのである」と述べている。¹⁰

同じことがお遍路についても言えるのではないかと思う。私は「お遍路的問題解決」というものがあるのではないかと考えている。それは、お遍路が直接問題を解決するわけではないが、長い距離を歩き通すという身体活動によって、人生の問題に対処する姿勢が変わってくるのである。

⁹ 斎藤（2000）、2 ページ。

¹⁰ 黒崎（2005）、171.172 ページ。

4. 人間性心理学を学ぶ

次に人間性心理学的観点からお遍路を考察するというを考えてみたい。お遍路をして生きる意味を見出すことができた、生かされていることに感謝したという人がたくさんいる。

このようなお遍路での体験は、本人にとっては自己実現の過程における一コマである。歩いていて「頓悟」したと書いている人もいる。それは一種の至高経験といえよう。もっとよい生き方をしたい、もっと人を愛せる人間になりたい、そのような人生を模索するためにお遍路をするという人がたくさんいる。そしてお遍路の過程で至高経験ともいえる忘れがたい経験をする。そのような人間心理を研究する心理学が人間性心理学である。つまり人間の心の病的な側面に関心をもち、心の病を治すための心理学ではなく、正常な人間がさらに人間的向上めざすという人間心理の側面に力点を置いた心理学である。その創始者はアメリカの心理学者アブラハム・マズローで、自己実現、至高経験は彼が使用した学術用語である。

マズローは自己実現に向かう行動として八項目を取り上げている。それらを紹介して、お遍路との関係を考察してみよう。第一に、自己実現とは、完全に熱中し、全面的に没頭し、無欲になって、十分に生き生きと経験することである。第二に、人生を、次から次へと選択する過程と考えようということである。第三に、内面の声に耳を傾けること。第四に、迷ったときには正直になること。第五に、以上第一から第四を随時実行すること。第六、自己実現とは人間の可能性を実現する過程である。第七、至高経験は自己実現の瞬間的達成である。第八、自分自身に自分を開くこと。¹¹

マズロー自身は、自己実現について考察するきっかけは、ルース・ベネディクトとマックス・ウェルトハイマーという二人の先生に出会ったことだったというので、この両者はこれらの八項目を体現していたような人物だったのであろう。われわれにとって自己実現は理想であるが、必ずしも自分の可能性を十全に花開かせることができているわけではない。むしろ人生とは迷いの連続であろう。そこにお遍路に出る理由がある。

上司と意見が合わず会社を辞めてお遍路に来たという若い女性がいる。「毎日自分にとって仕事ってなんだろうと考えながら歩いています」と日記に書いている。お遍路でひとり、ひたすら歩きながら、自分自身と向き合い、本当に自分がしたいことは何なのかと問いかける。マズローがいう「内面の声に耳を傾ける」、「自分に正直になる」態度がそこにある。お遍路には熱中もあるし、生き生きとした経験もあるし、悟りもあるかもしれない。お遍路は自己実現そのものではないかもしれないが、少なくとも自己実現へ向かう大きな一階梯といえると思う。

¹¹ マズロー（1973）、第三章を参照。

5. メタファー論を学ぶ

お遍路という単なるウォーキングから、われわれはなぜ人生の知恵を学ぶことができるのかという疑問が出てくるのは自然なことである。ここで役立つのがメタファー論である。メタファーとは隠喩、すなわち「ある物を別の物にたとえる語法一般」のことである。(広辞苑)たとえば「空港のテロ対策は穴だらけ」の「穴だらけ」はたとえである。「論文執筆に行き詰まる」の「行き詰まる」もたとえである。「困難を乗り越える」の「乗り越える」もたとえである。このようにわれわれは日常生活においてメタファーを無意識のうちに数多く使っている。われわれが何か抽象的な事柄を表現しようとするとき、具体的な事柄でたとえることが多いということをメタファー論は明らかにする。

お遍路はこのようなたとえ話によって人生について学ぶ行といえるのではないと思う。お遍路にはそのための仕掛けがあらかじめ用意されているように思われる。まず遍路衣装の白衣であるが、これは「死に装束」とされている。この「死」はもちろんそれですべてが終わるという死ではなく、再生ということだろう。新しい人生のために古い自分は死ぬのである。つまり白衣を着ることは新しい生き方をするという意味である。金剛杖は弘法大師の身代わりとされる。杖は支えであり力であるから、これを弘法大師にたとえることは理にかなっている。

巡拝の途上は「同行二人」であり、どんなに嫌なこと、つらいこと、苦しいことがあっても、それはすべて弘法大師のはからいとしてありがたく受け入れるべしという約束事がある。このような枠組みのもとでお遍路さんは歩きはじめる。「歩く」は「生きる」の意味であることは誰も知っている。結婚の誓いで「これから二人で力を合わせて歩いていきます」と言うように、われわれは人生を無意識のうちにウォーキングにたとえている。以上から明らかなように、お遍路は人生のたとえ話であり、弘法大師の教えを支えにして、人生の生き方を学ぶ行なのだと思う。

お遍路はその途上で出会う森羅万象からメタファーによって学ぶものだという考えは、前述の「六塵悉く文字なり」という空海のことばによっても根拠づけられる。空海はこの世界のすべてが何かを語っている文字であるという。われわれはそれを解読し、そこから学ぶことができるのである。

さて、それではお遍路さんが実際にお遍路から何をどのように学んでいるか、いくつかの実例をあげてみよう。造船会社を定年退職してお遍路を始め、今では四国霊場公認先達になっている人物が語ってくれた話である。「退職した年に妻の希望で一緒にバス遍路ツアーに参加した。そこで初めて歩き遍路をしている人を見かけた。こんなに長い距離を歩いている人がいるのかと驚いた。そして歩き遍路をしている人の姿が神々しく見えた。よし来年は絶対に自分が歩き遍路になろうと決意した。翌年、それを実行した。一番札所の霊山寺の山門に立った時、この年になっても歩き遍路ができる丈夫な体を両親から授かったのはありがたいと思うと感謝で目頭が熱くなった。歩き出すとたびたび道に迷い、そのたびに心細くなる。オレはこんなことでおろおろするような人間だったのかと思う。会社で

も家庭でも、自分が大将で、あれこれ命令してきた。しかし、ほんとうの自分はこんなに頼りない人間だったのだ。しばらく歩くと疲れて歩けなくなる。背中のリュックが重い。そのときお大師様の声が聞こえる。なんでも自分でかかえようとするな、荷物をすてなさいと。人生を振り返ると、私はなんでも自分でやらないと気が済まない人間だった。もっと仕事では部下に、家のことは家人にまかせてもよかった。お遍路にもあれがいる、これがあるとたくさんもってきて荷物が増えてしまった。いらないものは全部送り返して身軽になった。歩き遍路で何周もしたのは、お遍路をするたびに、今回はここがうまくいかなかった、次はもっとうまくやろうと思うからである」。

ここで話者が遍路と人生を重ねていることは明白である。歩き遍路が神々しく見えるのは自分の足で人生を歩くことと重なるからであろう。丈夫な体を授けてくれた両親に感謝して涙を流すのは、おかげでこれまで 60 年の人生を無事に過ごせたことに思い至るからである。お遍路で道に迷うのは人生で道に迷うことである。背中の重荷は人生の重荷である。お遍路で経験することが人生と重なるからこそ感動がある。

別の事例である。「定年退職を機会に妻と二人で歩き遍路にすることができた。私が行こうと言いだし、妻はお付き合いのはずだったが、お遍路を始めるとすぐに私が足を痛めてしまい、毎日妻に自分の足の面倒をみてもらっているのは情けない。考えてみると、これまでの人生も自分が金をかせぎ妻の面倒をみてきた、リードしてきたのは自分だと思っていたのだが、実は妻に支えられ助けられて今日までくることができた人生だったと気づいた」。ここでもお遍路を人生としてとらえることで、このような気づきがあるのだと言えよう。

また別の事例。自転車遍路をしている若者である。「自転車を押して登りながら、何度下の楽な道を行こうと思ったことか。しかし、そうしたら負けになると思ってがんばった」。自転車を押して坂道を登る場面は、人生の困難に直面する場面に重なる。スポーツなら「無理しなかった」と笑って済ませることができるが、ここでは人生の生き方にかかわってくるから譲れないのである。

以上見てきたように、「人生即遍路」（山頭火）なのである。¹²お遍路で出会うことすべてから、お遍路さんは何をどのように学ぶのかをメタファー論を参考にしつつ考察していくとお遍路の本質がよく見えてくるように思われる。

6. 現代日本社会について学ぶ

お遍路はまた、現代日本社会について考えることに直結してくる。お遍路さんの世界をのぞいてみると、そこはまさに現代社会を映す鏡であると新鮮な驚きを感じる。定年退職した人たちが新しい生き方を模索してたくさん歩いている。夏休みには大学生が多いが、それ以外の季節で若い人たちというと、多くはリストラで失業した人たちである。「お遍路の誰もがもてる不仕合せ」（森白象）。妻を亡くした、夫を亡くした、息子を亡くした、友

¹² 横山（2003）、16 ページ参照。

人を自殺で亡くした、うつ病になった、仕事が見つからない、自殺未遂だった、等々の問題を抱えた人たちがたくさん来ている。まさに現代日本社会の諸問題の縮図という印象を受ける。お遍路動機を知ると、現代社会の問題について深く考えさせられるのである。

いくつかのお遍路さんの例をあげてみよう。NHK が放送した「2008 年の遍路たち」に登場したお遍路さんのひとりは、前年始めた事業が行き詰まり、その後うつ病になった 30 代の男性だった。奥さんの実家の農業の手伝いをしていたが、自らの力で病気を克服したいと元旦から歩き遍路を始めた。40 日歩き続けて無事結願することができた。その日は大窪寺の近くの宿に泊まり、翌朝、奥さんが宇和島から車で迎えに来た。「がんばりすぎて病気になる。力抜いていいんじゃないかと思います。・・・また新しい人生を見つけていきます。新しいスタートです」と語る。

この番組に登場するもう一人のお遍路さんも 30 代の男性である。お遍路をする理由を次のように語る。結婚を前提に長年同居してきた女性と別れた。しかもリストラで職も失った。まさか職まで失うとは思ってもいなかったという。そのとき、ふと心に浮かんだのが遍路だった。仙遊寺の住職に「遍路とは今風に言うとりセットだ」と励まされ、しきりにうなづく。まだお遍路の途上であるが、「終わったときには、次の人生を充電したような形で始められるのではないかと思います」と語る。

旧稿にも引用させてもらったが、お遍路で救われた、心の避難所四国があってよかったという若いお遍路さんの声がある。人生の問題を抱えた人々が、お遍路をすることで自分なりの答えを見出すのはすばらしいことである。しかし多くの事例を見ていると、それと同時に、日本社会はずいぶんアンバランスな社会ではないかとも思わざるをえない。成功、成長、勝利、そのようなプラス面にばかり注意を払って、うまくいかない場合にどうするかということが「自己責任」の名のもとにほとんど無視されているのではないだろうか。多くの人々を生死の瀬戸際にいとも簡単に追い詰める日本社会の問題を考えずにはいられなくなる。

代表的な事例として自殺を考えてみたい。1998 年以降、それまで 2 万人台だった自殺者が 3 万人台に急増し、その状態が今日まで継続している。『自殺論』のデュルケームが言うように、自殺は個人的なものではなく、社会的なものである。¹³ 社会の仕組みが毎年一定の自殺者をつくりだす。日本の場合、この 10 年間の自殺増の原因は、主として派遣切りと中小企業経営者の困窮ではないかといわれている。上に紹介した NHK「2008 年の遍路たち」の二人のお遍路さんは、困窮する中小企業経営者と派遣切りにあった労働者の代表のようにも感じられる。

派遣切りなどで困窮した人たちがお遍路に来て、お接待その他の励ましで力を回復し、新しい再出発をしているという事実を考えると、あらためて長い歴史をもつお遍路の力に畏敬の念を抱かずにはいられないが、同時に、現代のわれわれはそのようなものに頼るだけでなく、「再チャレンジ支援」の具体的制度をつくるなど、社会の責任としてもっと知恵

¹³ デュルケーム (1985)、375 ページ。

を絞らなくてはならないのではないかと考えずにはいられない。

7. 現代型観光について学ぶ

最後に、観光という観点からお遍路を眺めてみよう。近年、お遍路をする人が増えているが、それが仏教の修行としてのお遍路でないことは明白である。現代の日本人にそのような信仰心があるわけではない。むしろお遍路も観光のカテゴリーで考えられることが多いといえよう。

旅行会社のチラシには様々なパッケツアーのひとつとして四国霊場巡りが入っているし、小豆島観光協会のサイトにも島四国霊場の項目が立てられている。お遍路さんの数は定かではないが、四国遍路で年間 30 万人といわれる。小豆島遍路の場合、霊場会の統計では約 3 万人とのことである。地域の観光産業という観点から見ると、量的にはさほどでもないのかもしれない。小豆島の観光客は 100 万人を少し上回る程度といわれているので人数では 3%程度ということになる。しかし、観光地小豆島につけ加えている魅力ははるかに大きなものがあると思う。寒霞溪、おさるの国、映画村、オリーブ園、エンジェルロード。それだけなら小豆島の観光はいかにも貧しいという印象を避けがたい。歴史ある島四国の霊場こそが小豆島の観光に品格と重厚さをつけ加えているように思われる。また、お遍路さんは毎年繰り返し訪れる人たちである。それだけ小豆島の魅力に引き付けられている人たちである。実は、お遍路をしなければ見られない絶景が小豆島にはたくさんあるのだが、これも意外に知られていない。

島の人たちもお遍路の魅力を再発見しつつある。島の人たちがお遍路をするようになったのは比較的最近のことだという。かつては島外、とくに山陰、北陸地方からお遍路さんはやってきた。もちろん歩き遍路なので島の人たちとの触れ合いがあった。島の人たちはお接待をし、こどもたちはお遍路さんから豆をもらう習慣だった。しかし、現在のお遍路さんはほとんどが車かマイクロバスである。島の人たちと触れ合う機会も少なくなった。今では地元の人たちが歩き遍路をするようになった。お遍路ブームといわれるが、本四国のお寺にはぎわっているが、小豆島にはそのようなブームはない。島の人たちが歩き遍路をするようになったことが、新しい傾向である。

団体旅行がブームだった時代の観光に対して、現在は「新しい観光」の時代といわれる。お遍路を観光として見ると、それはそのような「新しい観光」のひとつということができる。前述のとおり、私は以前、お遍路に「スピリチュアル・ツーリズム」という名称をつけてみたのであるが、その特長として、観光であるとしても単なる物見遊山ではなく、なんらか神仏に触れる体験をしたいという動機があることを指摘した。宗教ではないが、それを通して人生の意味を考え直したい、よりよい生き方ができるようになりたいと考えている人たちである。

気楽に車を利用してお遍路をし、ついでに従来型の観光もするという人たちも、お遍路ではなんらかスピリチュアルな価値を求めている場合が多い。昨年 11 月にそのような小豆

島遍路をしている団体のリーダーにインタビューする機会を得たので、現代のお遍路さんの団体がどのようなものなのかここで紹介しておきたい。

この会は兵庫県豊岡市の団体で、会員数 200 人。リーダーの M 氏は 70 歳。お遍路は曾祖父から代々続いている。会員はほとんどが定年退職者である。活動は、一泊二日の小豆島遍路を春と秋に行っている。3 年間で小豆島八十八箇所を一周する計画である。秋の遍路ではスケジュールにみかん狩りも入れている。遍路は歩きでなければならないとか、3 泊とか 7 泊とか厳しいことを言えば、会員は減るばかりである。会で大事にしていることは「信仰、観光、健康」である。お遍路を通して仲間づくりをすることを楽しんでいる。小豆島遍路が中心であるが、地元の但馬六十六地蔵巡り、三十三観音巡り、それに四国遍路もする。総会は年一回。グランドゴルフをするなど親睦を深めている。会費はとらない。ロコミで会員は増え、200 人ぐらいいる。今回は 69 人が参加した。今回は小豆島の霊場を回った後、みかん狩りもした。一泊して明日は徳島の霊場を回って帰途につく。宗教色は少ない。宗教を強調すると会員は減る。ただお遍路を通して人間性を高めることが目標と考えている。小豆島遍路の魅力は山岳霊場である。洞窟内での護摩焚きで一時にせよ現世を忘れる経験ができるのがすばらしい。

このようにこの団体のお遍路の目的には、親睦を深めること、健康に過ごすこと、観光気分を味わうこと、そして精神的満足を得ることが含まれている。観光的要素も取り入れたお遍路だからこそ会員も増えているという M 氏の指摘は、観光としてのお遍路の可能性を考える上でたいへん参考になる。

一方の極に仏道修行としてのお遍路があり、他方の極にスポーツとしてのお遍路がある。その間の広い範囲に「スピリチュアル・ツーリズム」とも呼ぶべきお遍路があるのではないだろうか。人格向上をめざしつつ、四季の風景や土地の料理なども楽しむ旅行である。

8. まとめ

私は、お遍路になじみのない人にお遍路への道案内をしたいという動機で本稿を書き始めた。しかし必ずしもお遍路の概説を試みたわけではないので、それを期待された読者にはずいぶん偏った紹介という印象を与えたかもしれない。お遍路の研究というと、歴史学、民俗学、人類学、比較宗教学などのアプローチがとられる場合が多い。お遍路・巡礼とは何かを科学的に解明するために、そのような諸方法が取られるのは当然のことである。それらの諸研究の重要性はいうまでもない。そのような研究を知りたいという向きには、星野氏、真野氏の著作をお勧めしたい。¹⁴しかし、ここで筆者の関心は、お遍路経験とはどういうものかを紹介してみたいということであった。お遍路を通して、われわれはいかなる価値を得ることができるのかを考えてみたいということであった。

お遍路というのは、時間とエネルギーを多く消費する活動である。それに見合う価値が得られないのであればしても意味がない。しかし、お遍路は現代人が必要とするものを豊

¹⁴ 星野（2001）、真野（1996）参照。

かに提供しているのだということを上で説明してきたつもりである。そして、それらはわれわれの人的成長に大いに役立つ。

お遍路を通してわれわれが親しむ弘法大師空海の思想には、現代社会の難問を解決するヒントがある。お遍路を通して、現代人が失いかけている心身の健康を取り戻すことができる。自己実現の生き方ができる。森羅万象から学ぶ知恵を身につけることができる。現代社会の抱えている問題を知ることができる。現在求められている観光のあり方について考察を深めることができる。以上のようなメリットを紹介してきた。

空海が十住心論で語っているように、所与の人間の心というものは、そのままでは動物と同じレベルでしかない。われわれは本能的欲求のまま行動するのではなく、道徳的になり、宗教的にならなくてはならない。そのように人的に向上していくのが人間のあるべき姿であろう。学校で勉強するのもそのような人的成長のためである。お遍路もまた、われわれにそのような人的成長の機会を与えてくれる。だからこそ、今お遍路が注目されているのだと思う。お遍路自体は平安時代にまでさかのぼる歴史をもつ古いものであるが、古くて新しいのがお遍路といえよう。われわれがお遍路を通して学ぶことは実はたくさんあるのである。

(大賀睦夫 (香川大学経済学部教授))

第一部の引用文献

大賀睦夫「四国のスピリチュアル・ツーリズム」、香川大学経済学部ツーリズム研究会『新しい観光の可能性』(美巧社)、2008

岡本伸之『観光学入門 ポスト・マス・ツーリズムの観光学』(有斐閣アルマ)、2001

空海「声字実相義」、宮坂宥勝監修『空海コレクション2』(ちくま学芸文庫)、2004

空海、宮坂宥勝編著『秘密曼荼羅十住心論』(一)～(五)、四季社、2003

黒崎政男『身体にきく哲学』(NTT出版)、2005

斎藤孝『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』(NHKブックス)、2000

真野俊和編、『講座・日本の巡礼』全三巻、雄山閣、1996

瀬戸賢一『メタファー思考 意味と認識のしくみ』(講談社現代新書)、1995

辰濃和男『四国遍路』(岩波新書)、2001

デュルケーム『自殺論』(中公文庫)、1985

中沢新一『愛と経済のロゴス』(講談社選書メチエ)、2003

星野英紀『四国遍路の宗教学的的研究』(法蔵館)、2001

マスロー『人間性の最高価値』(誠信書房)、1973

松長有慶『密教』(岩波新書)、1991

宮坂宥勝『空海』(ちくま学芸文庫)、2003

村上保壽『現代社会を弘法大師の思想で読み解く』(セルバ出版)、2008

湯浅泰雄『身体論—東洋的心身論と現代—』(講談社学術文庫)、1990

横山良一『山頭火と四国遍路』(平凡社)、2003

第二部：小豆島遍路体験記

1. 小豆島について

はじめに小豆島の概要と主要な町の歴史的沿革について簡単に紹介する。

小豆島は瀬戸内海の東側にある島で、面積は全国の島の中で 2 番目に大きい 153.2km^2 である。海岸線の延長は 125.7km で、周囲 140km 、約 35,000 人の島民が暮らしている。

小豆島には小豆島町と土庄町の 2 つの町がある。2005 年の統計では小豆島町の人口は 17,257 人、土庄町の人口は 16,411 人であり、両町とも人口は減少傾向にある（図 1 参照）。また、人口に占める 65 歳以上の割合は小豆島町が 33%、土庄町が 31%である。香川県の人口に占める 65 歳以上の割合が 23%であるので、小豆島町と土庄町の高齢者の人口は比較的多いと言える。

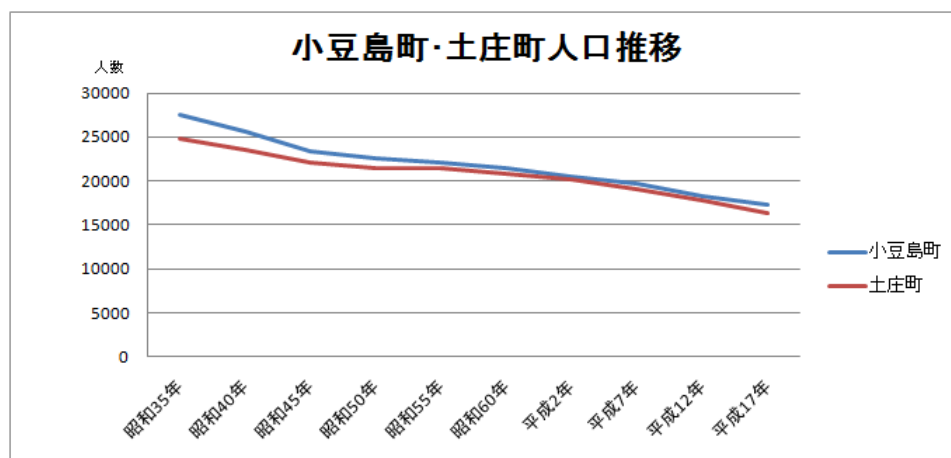


図 1 小豆島町・土庄町の人口推移

小豆島の歴史は古く日本書紀に小豆島の記述されている。また古代から南北朝時代くらいまでは内海地区は草加部郷、福田地区は小海郷、池田地区は池田郷と称され、3 世紀頃には応神天皇が小豆島を行幸したという伝説が残っている。平安初期から南北朝くらいまでは皇室の所有地とされ、江戸時代には内海地区は幕府の天領地、池田地区は津山藩の領地として統治されていた。明治時代に入ると愛媛県、名東県（現兵庫県の一部と徳島県）の所属となったが最終的に香川県の所属になった。明治 23 年町村制施行により、当時細分されていた村の分合を行い、いくつかの村ができた。その後、昭和 26 年 4 月 1 日には西村、草壁、安田、苗羽および坂手の 5 か町村が合併して内海町となり、昭和 29 年 10 月 1 日には池田、二生、三都の 3 か町村が合併して池田町となり、昭和 30 年 4 月 1 日に土庄、淵崎、大鐸、北浦、四海が合併し土庄町ができた。

<参考 HP>

「小豆島町」 <<http://www.town.shodoshima.lg.jp/index.html>>

「土庄町ホームページ」 <<http://www.town.tonosho.kagawa.jp/index.htm>>

「さぬき瀬戸しまネッ島」 <<http://www.pref.kagawa.jp/kanko/seto-island/index.htm>>

「香川県」 <<http://www.pref.kagawa.jp/>>

(西山優樹 (香川大学経済学部学生))

2. 小豆島の現状

次に小豆島の産業と交通の現状について述べよう。

(1) 小豆島の産業

小豆島における産業は主に 2 種類あるといえる。

1 つ目は食品産業であり、主なものとして 400 年の伝統を持つ醤油や全国三大産地の 1 つにもなっている素麺が挙げられる。最近では、醤油に関しては現代の食生活に合わせた新しい調味料づくりに力を入れており、素麺では戦国時代から続く伝統的な製法を今でも守り続けている。また、瀬戸内海地方独特の温暖な気候が、オリーブやハーブといった地中海作物の栽培に適しており、これらを用いた食品や化粧品などを製造、販売を行っている。

もう 1 つは観光産業である。小豆島には日本におけるオリーブ発祥の地としてオリーブ公園や、二十四の瞳の再映画化で使用されたセットを保存した二十四の瞳映画村がある。また、日本三大渓谷美に数えられる寒霞渓や、18 世紀頃に始まり、現在でも伝承されている農村歌舞伎舞台が有名である。

(2) 小豆島の交通

小豆島には小豆島バス株式会社が運営する路線バス、定期観光バスがある。路線バスは「坂手線・南廻り福田線」、「北廻り福田線」、「四海線」、「西浦線」、「三都（みと）線」、「神懸（かんかけ）線」、「スカイライン寒霞渓線」の 8 路線、定期観光バスには島めぐり観光コースとして「**A コース**」と「**B コース**」の 2 コースがあり、島の人たちや観光者の重要な交通手段となっている。

(3) 小豆島の今後の課題

懸念される問題の 1 つは、小豆島バスが路線バスの撤退を昨年 6 月表明したことである。小豆島の路線バスはほとんどの路線で 1 時間に 1 本しか運行していない（図 2 参照）が、北部では路線数がさらに少なく、交通手段として機能していない地域も多い。そこに今回の話で、島から無くなるという危機に陥ったが、小豆島の住民と町が出資し、運営する小豆島オリーブバス会社が設立された。路線数や運賃、ダイヤ等は従来通りに運営を行う予

定だが、今後同じようなサービスを維持し、さらにバスを必要とする地域に生かすことができるかが懸念される。また観光者の大半は自動車で観光するため、ますます路線バスの需要が減っているのに、バスに付加価値をいかにつけるかも課題である。

草壁港 停留所通過予定時刻表				
	坂手港	映画村	南廻り	紅雲亭
	行	行	福田	行
6			48	
7	20		33	
8	03・48			
9	18		38	
10	00	42	58	※45
11	※15・38			
12		52	33	※55
13	28・※40			
14	08		52	※55
15	※25	12		※40
16	03・※10		28	
17	13		38	
18	10・43		58	
19	35			
20	28			
備考	映画村行きは坂手港を経由します 福田行きは草壁港・安田経由です ※印は、3/20～11/30の期間のみ運行します。			
	平成21年4月1日改正 小豆島バス株式会社			

<参考 HP>

「四国新聞社」

<<http://www.shikoku-np.co.jp>>

「小豆島町」

<<http://www.town.shodoshima.lg.jp/>>

図2 小豆島のバス停時刻表

(北出聖治 (香川大学経済学部学生))

3. 小豆島の観光

陽の光にきらめくオリーブの葉と広がる瀬戸の青い海、小豆島は観光地としての顔も持っており、かつては弘法大師が修行のために立ち寄ったと言い伝えられた小豆島八十八ヶ所の風習が残る非常に伝統ある島である。

「二十四の瞳」で有名な岬の分教場は県内外から観光客が訪れている。二十四の瞳映画村は1954年、1987年の2度にわたって映画化された壺井栄小説「二十四の瞳」をテーマとする映画と文学のテーマパークである。1987年に映画化されたときのロケで使用された「岬の分教場」と大正から昭和初期の民家、漁師の家、茶屋、土産物屋など14棟のオープンセットを公開している。

また小豆島は独特な自然景観を有しており、トンボロ現象によって小豆島の前島から大余島へと続く約500mの細長い砂州の道が現れるエンジェルロードは「道の真ん中で手を繋いだカップルは結ばれる」と言われ、縁結びスポット、恋人の聖地とされている。棚田の広がる千枚田など数々の景観を目当てに観光客が訪れている。そして、群馬県妙義山・大分県耶馬溪とともに日本三大溪谷美と言われている寒霞溪は、小豆島だけでなく日本を代表する観光地の1つとして挙げられる。秋には岩の間をぬってカエデが真っ赤に色づき、切り立った岩壁の間をすり抜けるロープウェイからの眺めは圧巻で、人気を誇っている。

その他にも小豆島では農村歌舞伎や日本一どでカボチャ大会、瀬戸内海タートルフルマ

ラソン全国大会などのイベントが開催されたり、小豆島の特産品である醤油を扱ったマルキン醤油記念館や、オリーブを扱った施設、猿を見ることのできる銚子溪お猿の国など様々な観光施設がある。そして、瀬戸内国際芸術祭 2010 の会場の 1 つにもなっており、今後このイベントの観光客が小豆島に訪れることと予測される。

しかし、図 3 の小豆島における推定入込観光者数及び宿泊者数の推移によると、平成 10 年地点で前者は約 120 万人であったが、平成 20 年には約 107 万人に落ち込んでいる点から減少傾向であることがわかる。また、後者についても平成 10 年には約 50 万人あった宿泊客が、平成 20 年では約 42 万人と近年 40 万人前後を推移している。このように、小豆島の観光は観光客数や宿泊客数が比較的減少傾向であると言えよう。

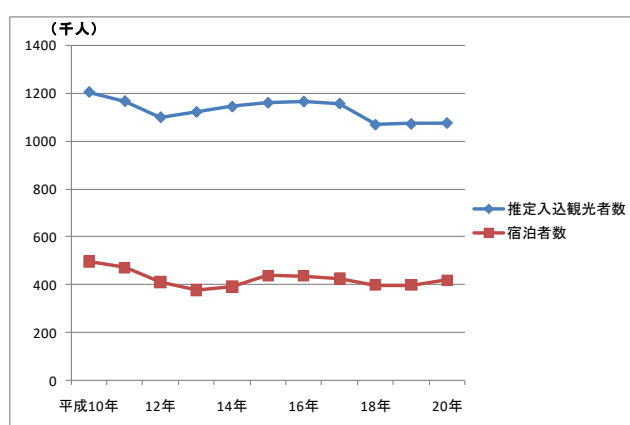


図 3 小豆島における推定入込観光者数及び宿泊者数の推移

小豆島観光協会統計資料を基に作成

(武市佳久・徳島也・野口浩輝 (香川大学経済学部学生))

4. 小豆島八十八カ所霊場

(1) 小豆島八十八カ所霊場

小豆島八十八箇所霊場とは小豆島を巡る霊場であり、別名、小豆島遍路（しょうどしまへんろ）や島四国（しましこく）とも呼ばれる。一般に、遍路は四国八十八箇所霊場（以下、四国遍路）とその巡礼者を指す場合が多いが、島四国の巡礼者も「お遍路さん」と呼ばれ親しまれている。

旅程は四国遍路が総距離 1,400km にも及ぶのに対し、小豆島遍路は 145km 程度であるため、その手軽さから中高年による徒歩の巡礼者も多い。徒歩での所要日数は約 1 週間が目安であるが、山深い小豆島の地形を巡るルートは一部起伏に富んでおり、全旅程の高低差は 570m にも及ぶ。一方で、近年では道路が整備され車で巡礼が容易となっただけでなく、昨今の健康ブームから、歩き遍路の一部をトレッキングコースとして小豆島旅行の

中に組みこむケースも少なくない。

ベストシーズンは桜が見ごろとなる 3～4 月頃で、四国遍路に倣い 1 札所に 1 種類ずつ 88 種類の桜が植えられている。この時期の小豆島は「彼岸の島」とも呼ばれ、毎年参拝客が最も多くなる季節でもある。また、木々の紅葉する秋も人気が高い。

モデルコースとしては、小豆島霊場総本院に近いお寺から時計回りに巡るコースが一般的である。四国遍路の約 10 分の 1 の距離とはいえ、靴の選択や宿の予約、1 日のペース配分などは四国遍路と同様に綿密な準備が必要である。別途遍路に必要な巡礼用具（白衣、金剛杖など）はすべて島内の遍路宿などで揃える事が可能である。また、四国遍路で使用する巡礼道具を小豆島遍路でも併用できる。

（２）小豆島遍路の歴史

小豆島遍路は弘法大師が生国の讃岐から京の都へ上京する行き帰りに、親しく小豆島に立ち寄って各所で祈念したことが礎となっている。しかし、それを裏付ける史料が残っていないため、今日では伝説として位置づけられている。四国遍路も同様にその起源が定かではないが、両者とも成立時期はほぼ同じとされている。

江戸時代の小豆島遍路は、明治半ばに出された司書によると、貞享 3 年(1686 年)に僧侶と島内の民衆が力を合わせ、四国遍路になぞらえて小豆島遍路を開いたとされている。当時、各寺院は寺檀制によって幕府の管理下におかれ、地区の中心的な役割を担っていた点から、各寺の機能は 17 世紀後半には固まっていたと考えられる。小豆島遍路は明治以降に創設されたミニ八十八箇所と呼ばれる他の遍路と比べて、かなり早い時期から、巡拝のシステムができあがったと言える。

大政奉還によって武家社会が終焉を迎え、天皇を中心とした明治新政府の時代になると、欧米社会の文化や生活習慣が一举に流れ込み、文明開化と呼ばれる変革の時期をもたらした。明治新政府は宗教政策において既存の神仏習合を否定した神仏分離令を発し、江戸幕府の民衆統括組織であった寺、ひいては仏教そのものの弱体化を図る廃仏毀釈を断行した。小豆島遍路も新しい方針の濁流に呑み込まれ、当時の巡拝者は著しく減少した。

このような霊場の低迷期を過ごし、再び興隆を目指そうとする動きが明治末期から起こってくる。明治 43 年(1910 年)に、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞ら、六新聞記者が巡拝記事を掲載し、霊場の紹介を行ったことを契機に復興の気運が高まった。その後、小豆島遍路の宣伝や団体巡拝者の募集、巡拝者を優遇し霊場巡拝の意義を達成することを目標とした「小豆島霊場会」が設立された。この霊場会は全国で最も早く生まれた組織であり、昭和に入ると巡拝者の増加に対して先達制度を設け、巡拝の模範者として認証した。

現在でも多くの法要が行われているが、それだけでなく、先達教師の講習会や弘法大師の教えを遍路に來たことのない人に広く布教する、大師伝道スクールなども開催されている。小豆島遍路は時代を経るごとにますますかつての活気を取り戻していると言えよう。

（３）小豆島遍路独特の特徴

小豆島遍路独特の特徴として、以下の２点を挙げることができる

特徴の１つ目として札所の番号と配置が挙げられる。四国遍路では一般的に札所の順番通り（逆打ちの場合は逆順に）に巡行を行うのが、小豆島遍路では概して札所の番号通りに巡礼する必要は無く、むしろ札番通りに巡ると不合理な道順となる箇所がいくつか存在する。時間に余裕があるならば番号を気にせずに自分でコースを決めて回ってもよいが、奥の院や山岳霊場などは開門時間が短い場合があるので注意が必要である。

もう１つは納経所の共有である。納経所とは納経帳に御宝印を押してもらう札所内のコーナーのことで、四国遍路のように札所毎に設置されているのが一般的である。しかし、小豆島遍路では納経所が設けていない札所が多く存在し、１ヶ所の納経所で複数の納経を一度にしてもらうことになる。具体的には、30ヶ所の寺院にある納経所で94ヶ所分（88ヶ所＋番外、奥の院）の納経を管理している。

四国遍路では、納経にかかる費用が１カ所につき300円程度必要なため、88カ所全てで納経すると26400円かかることになる。遍路において納経代を値下げしたり、異議を唱えたりすることはタブーとされているが、実際のところ高いと感じる人が多いようである。

一方で小豆島遍路は納経所が共有されていることもあり、場所によっては納経代300円で5つ以上の御宝印を押してもらえる札所もある。小豆島遍路は距離の身近さだけでなく納経の形態に関しても、四国遍路よりも手軽であると言える。

<参考資料>

月刊ぴ〜ぷる <小豆島霊場会特集号> 1995年11月号

（岡田佳奈・久保由希乃・浜西実咲・水野晃浩（香川大学経済学部学生））

5. 小豆島遍路コース別紹介

小豆島霊場会は、小豆島遍路の全行程を8つに分けている。各コースが一日で巡拝するのにちょうどよい距離となっている。われわれは、これまで全7回小豆島遍路を体験してきたが、ここではバス遍路1回を除く、歩き遍路で歩いた全6コース分をそれぞれ体験日程順に紹介していく。

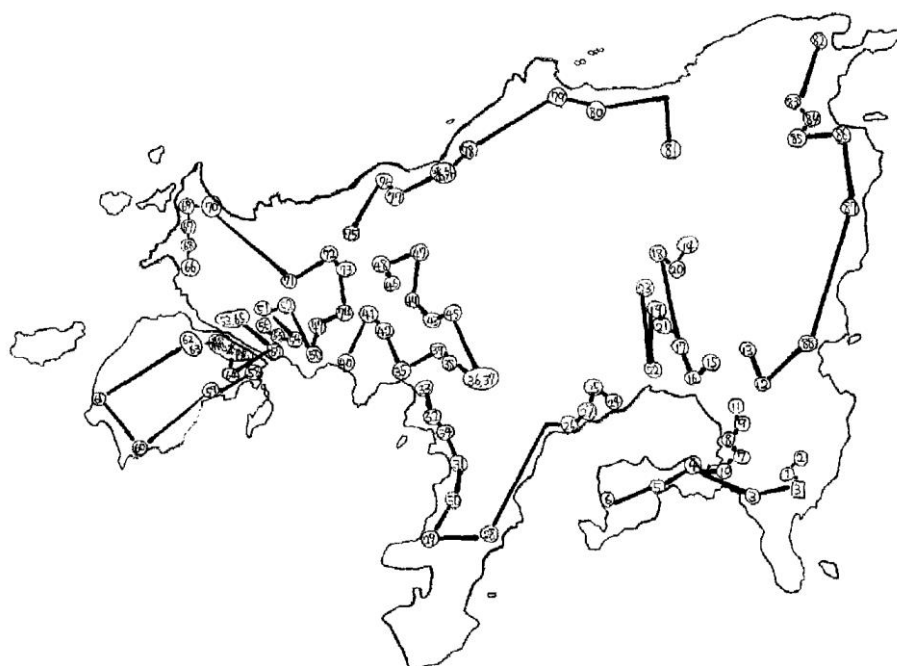
霊場会のコースは、小豆島霊場会が歴史や遍路行のし易さ、納経所との兼ね合いによって決定、構成したものであるため、札所の順番通りに巡ることを必ずしも要請されていない。なお、1コース及び2コースは巡っていないので今回の紹介では省略する。

（１）小豆島遍路第3コース（16.5km）

5月10日（日）の小豆島遍路は「ふれあい徒歩大巡行」に参加し、小豆島の北部に位置する奥之院 三暁庵、番外霊場 藤原寺を含む全9か所を打つ小豆島遍路3コースを巡った。

第 80 番 子安観音寺は、昭和 28 年の本堂客殿の再建を発願し、完成間近に焼失したことから不運を詫びて始めたという「うどんの接待」を受けることができる。この点から当寺「うどんの寺」とも呼ばれ、我々もうどんの接待をありがたく頂いた。また、「本堂は小豆島一」といわれるように、境内にある稚児大師像は寺の外から見ても確認できたほどの大師像であった。第 81 番 恵門ノ瀧への道のりは 3 コースの中で最も険しい道であり、約 1.3km もの山道が続く。ここでは、洞窟の中にあるお堂で護摩焚きを体験でき、非日常的な不思議な空間を肌で感じた。

図 4 小豆島遍路の 8 コース



土庄港	↓
↓ 30 分	5. 番外 藤原寺
1. 第 75 番 大聖寺	↓ 1 時間
↓ 8 分	6. 第 78 番 雲胡庵
2. 第 76 番奥の院 三暁庵	↓ 1 時間
↓ 15 分	7. 第 79 番 薬師庵
3. 第 77 番 歓喜寺	↓ 15 分
↓ 15 分	8. 第 80 番 観音寺
4. 第 76 番 金剛寺	↓ 1 時間半 ※休憩の 20 分は除く
↓ 10 分	9. 第 81 番 恵門ノ瀧

(2) 小豆島遍路第5コース(16.6km)

5月17日(日)の小豆島遍路は天気の都合により当初予定していた5コースの一部しか巡ることができなかった。

第9番 庚申堂の本堂は非常に古い建物であり、鎌倉時代に創建された寺であるという。第2番 碁石山への道のりは難所の1つに数えられており、急斜面の山道が続いていた。しかし、碁石山からの眺望は小豆島の街並みや瀬戸内海の美しい景色を堪能することができた。碁石山を出て、山沿いの道を10分ほど進むと第1番 洞雲山に着く。本堂は崖の洞窟の中に造られており、立派な観音菩薩が祀られていた。ここは昔、山岳崇拜の霊地であり修験山伏が修行した山であったということで、霊験あらたかな雰囲気を持っていた。

草壁港	↓
↓30分	4. 第1番 洞雲山
1. 第9番 庚申堂	↓30分
↓5分	5. 奥の院 隼山
2. 第8番 常光寺・第7番 向庵	↓30分
↓40分	6. 第3番 観音寺
3. 第2番 碁石山	↓30分
↓10分	7. 第4番 古江庵

(3) 小豆島遍路第6コース(11.6km)

6月7日(日)の小豆島遍路は寒霞溪から南側の6コース約8kmの道のりを巡った。第20番 佛ガ滝では洞窟のような所に御本尊の薬師如来が安置されていた。小豆島霊場で最高峰に位置する第14番 清滝山も佛ガ滝と同じように洞窟の中に本堂がある。本堂からさらにトンネルのような所を抜け、急な階段を登ると不動堂があり、その奥に不動明王が安置されている。寒霞溪の一隅に位置する第18番 石門洞のすぐ側には、その名前にもあるように自然にできた石の門があり、自然が織りなす造形美に圧倒された瞬間であった。

草壁港から猪谷までバスで15分	2. 第14番 清滝山
猪谷	↓40分
↓10分	3. 第18番 石門洞
1. 第20番 佛ヶ滝	↓1時間
↓45分	4. 第21番 清見寺

(4) 小豆島遍路第4コース(14.5km)

9月13日(日)は「ふれあい徒歩大巡行」に参加し、小豆島の東部に位置する4コースを巡った。第82番 吉田庵から第83番 福田庵までの道のりは海沿いの道路もあるが、今

回は山道を歩いた。福田庵は民家のような建物で、近隣の老女が交代で堂番をしている。
第1番 洞雲山から順打ちすれば結願となる第88番 楠霊庵は急な階段を登れば楠の大木で
建立された堂庵がある。ここから第12番 岡ノ坊までの道のりはこの日2度目の山越えで
あった。小豆島遍路は起伏の激しさも特徴の1つに挙げられていることから、距離の短さ
以上の疲労感を感じた。

土庄港	↓30分
↓30分	5. 第87番 海庭庵
1. 第82番 吉田庵	↓30分
↓1時間 ※1回目の山越え	6. 第88番 楠霊庵
2. 第83番 福田庵	↓1時間 ※2回目の山越え
↓5分	7. 第12番 岡ノ坊
3. 第84番 雲海寺・第85番 本地堂	↓5分
↓1時間	8. 第13番 栄光寺
4. 第86番 当浜庵	

(5) 小豆島遍路第7コース(17.4km)

10月25日(日)は草壁港から池田港までの小豆島の南部の7コースを巡った。

第28番 薬師堂は「餅の庵」として知られ、遍路の頃は村の人たちが茶店で草餅を販売
していた。また、薬師堂の近くには「長崎のしし垣」があり、ここからの景色も美しかっ
た。第29番 風穴庵へ行く遍路道では手すりが設置されているが、急な上り坂が多く、非
常に険しい道のりであった。しかし、遍路道にはいたるところに「同行二人」や「がんば
って」などの文字が書かれた札が木の枝に吊るされており、お遍路への気遣いが伝わって
くる。この日最後に訪れた第31番 誓願寺は国指定の天然記念物の大きな樹齢1千年以上
ともいわれるとても印象的なソテツの木を見ることができる。

草壁港	↓
↓5分	4. 第28番 薬師堂
1. 第24番 安養寺	↓30分
↓30分	5. 第29番 風穴庵
2. 第25番 誓願寺庵	↓1時間 ※けもの道のような遍路道
↓15分	6. 第30番 正法寺
3. 27番 桜庵・第26番 阿弥陀庵	↓30分
↓1時間	7. 第31番 誓願寺

(6) 小豆島遍路第8コース(11.6km)

11月29日(日)のゼミで最後の小豆島遍路は、池田港周辺から北側の8コースを歩いた。

山岳霊場が多く、急な坂を30分以上かけて登るのがこのコースの特徴である。また、本堂が山の頂上にある所からは瀬戸内海を一望でき、紅葉に色づく小豆島の新しい一面を見ることができた。このコースは小豆島の自然風景を満喫できるコースである。第44番湯船山には日本名水百選に指定されている清水が湧き出ており、乾いた喉を潤してくれる。また、第47番 梅尾山は岩窟を穿った道場であり小豆島遍路の典型的な構えであった。

池田港	↓50分
↓30分	6. 第43番 浄土寺・第45番 地藏寺堂
1. 第40番 保安寺	↓25分 ※棚田や紅葉が楽しめた
↓25分	7. 第44番 湯船山
2. 第41番 佛谷山	↓20分
↓1時間5分	8. 第47番 梅尾山
3. 第42番 西の滝	↓5分
↓45分	9. 第48番 毘沙門堂
4. 第38番 光明寺	↓10分
↓15分	10. 第46番 多聞寺
5. 第37番 明王寺	

参考文献

富永航平『小豆島 遍路と旅』朱鷺書房、2003

平幡良雄『小豆島 遍路』満願寺教化部、1990

(野口浩輝(香川大学経済学部学生))

6. 小豆島ふれあい徒歩大巡行

上に述べた8つのコースは、「小豆島ふれあい徒歩大巡行」のためのコースなので、この「ふれあい徒歩大巡行」についても紹介しておきたい。

「小豆島ふれあい徒歩大巡行」は小豆島霊場会が年に2回(5月と9月)企画している歩き遍路のイベントで、今まで25回開催されている。内容は、88ヶ所ある札所を距離や巡り易さを考慮して8つのコースに分け、参加者はその中から1コースを1日かけて歩く「1日遍路行」という形態をとっている。参加費は昼食のお弁当がついて2000円で、コースごとに担当の先達さんが案内やガイドをしてくれる。

各コースの詳細は以下の図を示した。

図5 「小豆島ふれあい徒歩大巡行」の各コース

日 程	行 程	霊場数	距 離
1 日目	58西光寺 →58奥 →59 →60 →61 →62 →63 →総本院 →64 →57 →65 →53本覚寺	12ヶ所	16.7km
2 日目	66等空庵 →68 →67 →69 →70 →71 →72奥 →72 →73 →74 →49 →50 →52 →51 →54 →55 →56	17ヶ所	13.3km
3 日目	75大聖寺 →76奥 →77 →76 →藤原寺 →78 →79 →80 →81恵門ノ瀧	9ヶ所	16.5km
4 日目	82吉田庵 →83 →84 →85 →86 →87 →88 →12 →13栄光寺	9ヶ所	14.5km
5 日目	2碁石山 →1 →3奥 →3 →4 →5 →6 →10 →7 →8 →9 →11観音堂	12ヶ所	16.6km
6 日目	14清滝山 →20 →18 →17 →16 →15 →21 →19 →22 →23本堂	10ヶ所	11.6km
7 日目	24安養寺 →25 →27 →26 →28 →29 →30 →31 →34 →32 →33長勝寺	11ヶ所	17.4km
8 日目	40保安寺 →41 →42 →35 →39 →38 →36 →37 →45 →43 →44 →47 →48 →46多聞寺	14ヶ所	11.6km

出典 「愛媛県生涯学習センター 生涯学習情報提供システム」

<http://ilove.manabi-ehime.jp/system/regional/index.asp?P_MOD=2&P_SNO=12&P_FLG1=3&P_FLG2=2&P_FLG3=3&P_FLG4=2>

ふれあい徒歩大巡行の参加者の多くは年配の方々であるが、時には両親や祖父母に連れられた子どもや、我々の様な学生も参加していた。こうして、ある程度まとまった人数が1つの集団として歩き遍路を行うため、人と人との交流は様々なものになる。

初回の参加では小豆島遍路用の納経帳が配られる。納経所が設置してある札所に到着すると、先達さんが納経希望者の納経帳と御宝印代を集め、お勤めを終えると御宝印が押されて返される。我々と一緒に参加した人の中には、その回のコースで小豆島の札所を全て廻り終えた人もおり、他の参加者から大きな拍手を受けていた。

「小豆島ふれあい徒歩大巡行」において特徴的な点は、遍路が新しいコミュニケーションを創出する機会を与えることである。何度も参加している年配の方々にとっては、我々のような学生の存在は興味深いものであるだろうし、我々としても遍路を通して多くの人生の先輩と会話ができる絶好の機会である。初回こそ未知の経験による緊張でぎこちないものではあったが、9月に参加した2回目ともなると、我々も前回の参加者との再会の喜びを感じることができ、夏の間に行った遍路の話や世間話を人生の先輩方とやりとりすることもできた。さらに大勢で行うお勤めでは、集団の一体感をより一層感じることができ、和気藹々とした遍路道とはうってかわって、仏教の奥深さや厳かさを知ることになった。

歩き遍路は本来1人あるいは少人数で行われるものであり、此度のような大人数による巡行に対して違和感を覚える人もいるかもしれないが、1日という限られた時間の中を集団で巡行できるのは小豆島遍路が有する手軽さ由縁の魅力である。この大巡行が仏教的思想体験とコミュニケーションの創出の場を提供する点は、観光として成立させていく上で重要な要素となるのではないかと思う。



図6 第2回 小豆島ふれあい徒歩大巡行 4コースにて

(津田裕太・宮内崇匡 (香川大学経済学部学生))

7. 小豆島お遍路体験記

お遍路体験記その1

「お遍路＝特定の仏教信者（弘法大師信者）が信仰心から行う宗教行為」である。これが実際に小豆島遍路体験をする前の私にとっての、お遍路に対する正直な認識であった。しかし、この認識は間違っており、特に近年の一般のお遍路さんたちの参加理由は、大賀先生の研究結果で明らかになっているように、信仰心からだけではなく、願いを成熟させる為であったり、自分磨きの為であったり、心を癒すためであったりと様々なものになっている。そして、一度小豆島遍路に参加した人は何度も繰り返し参加しているという事実を知り、驚いた。今回の小豆島遍路へ参加するにあたって、私自身の場合はまだあまり弘法大師に関する知識も無かったため、信仰心による参加というものではなかった。また、自分磨きのためという思いも多少はあったが、それよりも、「何度も戻ってきたくなくてしまってお遍路の魅力とは何か」という漠然とした疑問を抱き、それを解決することを参加目的にすることとした。そのため、今回の大賀ゼミで行われた小豆島遍路では、単純に小さな驚きや発見をもとに小豆島遍路の魅力を探しながらの巡行となった。

まず一つ目の魅力は、山道を歩き自然に触れることによって、あらためて自然の恩恵やその脅威を感じることが出来るというものである。その具体例として、第81番恵門ノ滝へと続く細い山道での体験を紹介したい。この山道は急勾配な上に足場も歩きにくく、常にバランスをとりながら進んでいかなければならなかった。そのため非常に大変な道のりであった。しかし、この大変な山道の中でも自然の恩恵を感じることができた。まず最もありがたく感じられたのは土の柔らかさである。この土の柔らかさは、足にあまり衝撃を与

えず、疲れた足でも歩き易いようになっていた。また、木が生い茂っているところでは葉っぱが日光を遮ってくれており、日に焼けて疲れることなく進むことが出来た。そのうえ、こうした場所では空気がひんやりとしているため、本来の気温が高くてまだいぶ気持ちよく登ることができた。このように、普段は知識として知っていた自然の恩恵を、お遍路を通して実際に体験することによって本当に実感することが出来るのも、お遍路の魅力の一つであるように感じられた。また、小豆島遍路では身近にある自然の存在を感じることも出来るのである。巡礼の道のりの途中ではテントウムシや木から落ちたどんぐり、タンポポの綿毛などを見つけることができた。これらのものは、小学生の頃などには毎年と言って良い程よく見つけて遊んでいたものである。しかし、最近はあまり見ることの無いものである。もしくは、実際視界に入っていたとしても気に留めることもなく、きちんと記憶に残ることはないのである。しかし、お遍路の場合は徒歩で比較的ゆっくりと進んでいるため、こうした身の回りにある自然にも気付きやすいのである。このように、普段とは違った感覚を養ったり、些細な発見から季節感を感じたり出来る点がお遍路の魅力であるように感じられた。そのうえ、今回の小豆島遍路では、野生の猿の群れに遭遇することもできた。そして、こうした野生の猿との遭遇によって、改めて自然の大切さを感じることもできた。動物園の中で飼われている猿や、テレビの中の映像として見る猿の姿とは比較にならないほど、自然の中で生きる本物の野生の猿の姿は常に懸命に生きている命の大切さを物語っているように感じられた。それと同時に、もし猿に襲われたときのことを考えるとその対処法がわからず怖くなってしまった。そして、自分の自然に対する知識の無さとその自然からの脅威に対する人の弱さや対処の仕方の無さに改めて気付かされた。このように、小豆島遍路とは様々な驚きや発見との遭遇があることから、楽しみを巡る旅という側面も持っていると考えられる。

また、人々の気遣いや優しさに触れられるという点も小豆島遍路の魅力の一つである。体力的に歩き続けることが厳しくなる山道でも、ほとんどの場所には手すりが設置されていたためとても歩きやすくなっていた。こうした手すりはお遍路さんのために設置されたものであり、そうした人々の心遣いには感謝せずにはいられなかった。また、札所の付近には無人のみかん販売所がいくつか設けられていた。無人のため閉店や休業がなくいつでも購入することが出来るので、お遍路さんにとっては非常にありがたい存在であるように感じられた。しかし、この仕組みだと料金の支払いも個人の自由となってしまう。そのため、無人販売所という仕組みは、販売者と購入者の両者が人を信頼し思い遣る気持ちがあって成立するものである。また、人への思い遣りの気持ちは、出会った人々のお接待にも表れていた。実際に、金剛寺や観音寺など多数の札所でお茶やうどんなど出していただいたのだが、それらを頂けると同時にお接待をして下さる人々の心遣いがとてもありがたく感じられた。こうした、人を信じ思い遣る気持ちをふとした瞬間に感じられるといった点もお遍路を続けていく上での重要なものになっているように思われる。このように、何度でも人々の思い遣りの心に触れ、それに対し感謝することの大切さを感じることもできた。

また、現在のお遍路さんは必ずしも一人で行うというものではなく、子どもや身近な人とも一緒に参加し、楽しめるという点も近年の小豆島遍路の魅力のひとつとなってきたと考えられる。今回私たちが参加した「ふれあい大巡行」のお遍路では小学生くらいの小さな子どもも参加していた。彼らは祖父母と一緒に巡行に参加しているようであった。歩き遍路では、山道での植物や生き物との出会いはもちろんのこと、普段は車であっさりと通り過ぎてしまうような道端に咲く草花の自然とも子ども達は十分にふれあうことができる。そのうえ、札所にたどり着くためには足場の悪い道も歩かなければならない。しかし、お遍路は自分のペースで歩くことができる。そのため、子供たちもお遍路体験を通して無理なく体力やバランス力を向上させ、目的を達成させるために必要な忍耐力も養うことができるのである。さらに、歩き遍路は長距離をゆっくりと時間をかけて進んでいくものである。そのため、子ども達は同行者である祖父母や他の参加者とも十分に会話を楽しむことができる。このように、ほんの少し日常から離れるだけで、様々な自然に触れ、自身の体力や内面を向上させ、周囲の人とゆっくり交流することができる歩き遍路は、子ども達にとっても有益なものであるように感じられた。また、グループで参加した場合も長時間会話をし、互いに協力して進んで行くことによって、グループ内でのコミュニケーション力やチームワークを高められるという効果も期待できる。こうした観点から考えてみると、身近な人と一緒に参加するお遍路とは、目的地が札所というだけの少し変わったハイキングやウォークラリーの一種として扱うことができるように思われる。

このように、今回の数回のお遍路体験を通じて、こうしたいくつかの小豆島遍路の魅力を発見することができた。そして、これらの様々な魅力や効果が存在していることにより、お遍路さんの参加目的が多様化してきたのだと考えられる。このように、各お遍路さんがそれぞれ自分なりの楽しみ方を見つけて、こだわりを持った巡行が行えるようになったという点が現在の小豆島遍路の特徴であり、人々が何度も繰り返しお遍路に参加したくなる要因であると思われる。

(岡田佳奈 (香川大学経済学部学生))

小豆島お遍路体験記その2

ゼミに入るまで小豆島で遍路できることすら知りませんでした。実際に体験してみると、小豆島の険しい山々の頂上付近や崖の近くに札所が多くあるため、山道や急な坂道を歩くのがほとんどでした。体力には自信があったのですが、一日かけ 20km 歩くことは予想以上に大変で、次の日は筋肉痛で思うように動けませんでした。たしかに小豆島のお遍路はかなり厳しい道のりを歩くので大変でしたが、お遍路をしないと体験できないこともありました。

まずそれは、小豆島の自然風景を満喫できたことです。小豆島にパワースポットとも言える場所がお遍路の途中で見られました。特に印象に残ったのは、美しい瀬戸内海の景色です。各コースの札所や遍路道から見る瀬戸内海は夕暮れ時が特に神秘的に見えます。ま

た、山岳霊場の札所と遍路道は自然を直に感じることができ、特に神秘的でした。このように隠れた小豆島の魅力は実際にお遍路をして初めて知ることができました。

以下は今までお遍路をしてきた 6 コースの紹介です。

● **小豆島お遍路第 1 回 3 コース（第 1 回ふれあい大巡業）**

土庄港

↓ 30 分

① 第 75 番 大聖寺

↓ 8 分

② 第 76 番奥の院 三暎庵

↓ 15 分

③ 第 77 番 歓喜寺

↓ 15 分

④ 第 76 番 金剛寺

↓ 10 分

⑤ 番外 藤原寺

↓ 1 時間

⑥ 第 78 番 雲胡庵

↓ 1 時間

⑦ 第 79 番 薬師庵

↓ 15 分

⑧ 第 80 番 観音寺（ふれあい大巡業ではうどんの接待があった。）

↓ 1 時間半 : （途中休憩の 20 分はのぞく、小豆島遍路最大の難所。全長 1.3km
の山道をひたすら登る。途中石の階段から足場の悪い山道がある。）

⑨ 第 81 番 恵門ノ滝

● **小豆島お遍路第 2 回 5 コース**

草壁港

↓ 30 分

① 第 9 番 庚申堂

↓ 5 分

② 第 8 番 常光寺・第 7 番 向庵

↓ 40 分

③ 第 2 番 碁石山

↓ 10 分

④ 第 1 番 洞雲山

↓30分

- ⑤ 隼山 : (瀬戸内海を一望できる展望台がある。)

↓30分

- ⑥ 第3番 観音寺

↓30分

- ⑦ 古江庵

● **小豆島お遍路第3回 6コース(主に山岳霊場)**

草壁港から猪谷までバスで15分

猪谷

↓10分

- ① 第二十番 佛ガ滝

↓45分

- ② 第十四番 清滝山 : (小豆島で一番高い場所。)

↓40分

- ③ 第十八番 石門洞 : (本堂は崖に作られている。)

↓1時間

- ④ 第二十一番 清見寺

● **小豆島お遍路第5回 4コース(第2回ふれあい大巡業)**

土庄港

↓30分

- ① 第82番 吉田庵

↓1時間 : (山の中の遍路道を登る。)

- ② 第83番 福田庵

↓5分

- ③ 第84番 雲海寺 ・ 第85番 本地堂

↓1時間

- ④ 第86番 当浜庵

↓30分

- ⑤ 第87番 海庭庵

↓30分

- ⑥ 第88番 楠霊庵 : (本堂までの階段が急。)

↓1時間 : (2回目の山越え、ただし一般道。)

- ⑦ 第12番 岡ノ坊

↓5分

- ⑧ 第 13 番 栄光寺

● 小豆島お遍路 6 回目 7 コース

草壁港

↓ 5 分

- ① 第 24 番 安養寺

↓ 30 分

- ② 第 25 番 誓願寺庵第

↓ 15 分

- ③ 第 27 番 桜庵・第 26 番 阿弥陀庵

↓ 1 時間

- ④ 第 28 番 薬師堂

↓ 30 分

- ⑤ 第 29 番 風穴庵

↓ 1 時間 (途中、一般道と遍路道に分かれていて、今回は遍路道を通った。薄暗く、足場が整備されていないケモノ道のような、急な登り道。)

- ⑥ 第 30 番 正法寺

↓ 30 分

- ⑦ 第 31 番 誓願寺

● 小豆島お遍路第 7 回 8 コース(自然を満喫しながら遍路ができる。)

池田港

↓ 30 分

- ① 第 40 番 保安寺

↓ 25 分

- ② 第 41 番 佛谷山

↓ 1 時間 5 分 : (山の中の遍路道を 15 分登ると、瀬戸内海を見渡せる展望台がある。)

- ③ 第 42 番 西の滝 : (入口には紅葉の木があり、11 月下旬は赤く染まる。)

↓ 45 分

- ④ 第 38 番 光明寺

↓ 15 分 : (次の札所の看板はあるが、わかりづらい。)

- ⑤ 第 37 番 明王寺

↓ 50 分

- ⑥ 第 43, 45 番 浄土寺

↓ 25 分 : (前に棚田が広がり、山の紅葉も楽しめる。)

- ⑦ 第 44 番 湯船山

↓20分

⑧ 第47番 梶尾山

↓5分

⑨ 第48番 毘沙門堂

↓10分

⑩ 第46番 多聞寺

今後の課題

小豆島遍路の魅力を多くの人に知ってもらうことが一番の課題です。四国遍路はよくメディアで取り上げられていますが、小豆島遍路の知名度はそれ程高くありません。そのためには小豆島遍路だけの魅力を伝える必要があります。小豆島遍路をすることで心身ともに鍛えることができるのは事実です。しかし、小豆島遍路は大変だという印象だけ持たれると実際に来る人の数は増加しないと思います。そこで「パワースポット」の存在を前面にPRし、魅力を伝えることができればお遍路への抵抗を和らげることができると思います。さらに険しい遍路道を歩きぬくことで達成感を味わえ、また自信がつく絶好の機会だと同時にPRする必要もあります。そのためにも、今後は小豆島の遍路についての現地調査や霊場会の方々ともコミュニケーションをとる必要があります。

(北出聖治 (香川大学経済学部学生))

小豆島お遍路体験記その3

私は、ゼミの選択をするときに丁度須藤元気さんの本にはまっていた。須藤元気さんは、元・格闘家でありスピリチュアルの世界に詳しい人物である。このゼミの研究テーマは「スピリチュアルツーリズムについて考える」ということで、何か惹きつけられるものを感じた。実際に小豆島へ行き自分たちでお遍路の体験もするということがあった。お遍路に少し興味がありつつも一人ではなかなかする機会がなかったため、お遍路を体験できるよい機会だと思ってこのゼミを選択した。大学生になって生活のリズムが崩れてしまい、自分にとても甘くなっていたので、お遍路の道りを歩き切ることで自分の気持ちを鍛え直そうという目的もあった。四国八十八ヶ所に比べて行程が短く、更に何回かに分けて巡るということだったのでお遍路に行く前はそんなにきついというイメージは持っていなかった。

小豆島遍路は5月10日、5月17日、6月7日、6月21日、9月13日、10月25日、11月29日の7回行い、そのうち初めの5月10日と9月13日は「小豆島ふれあい徒歩大巡行」であり、6月21日はガイドさんがついてくれて、小豆島の観光地を回りながら行うバス遍路であった。私は、用事のため9月13日と11月29日は参加できなかったため、今までに5回参加したことになる。

◆5月10日

この日は私にとって初めてのお遍路体験の日であった。高松港を7時40分発のフェリーに乗るということで、やる気よりも眠さが勝っていた。こんなに早起きするのは久しぶりだなあと思いながら、高松港まで自転車をこいだ。この日は「小豆島ふれあい大巡行」というイベントの日だったので、高松港の待合室にはお遍路さんの格好を身にまとった人々が大勢いた。

この日は第75番札所の「大聖寺」から始まり、「三暁庵」、「歓喜寺」、「金剛寺」、「藤原寺」、「雲胡庵」、「薬師庵」、「観音寺」、第81番札所の「恵門ノ滝」まで9ヶ所を回った。この日はほとんどのことが初めての経験で戸惑うことが多かった。大賀先生が事情によりフェリー乗り場に残ってくださったので、初めの方は私たち生徒だけで行うお遍路だった。本当はみんなで一緒に出発しなければいけなかったのだが、そのようなことを知らなかった私たちは勝手に出発してしまい、おまけに道を間違えていたため大聖寺まで来た道に戻るようになってしまった。そこからまた再出発し、16.5kmの道のりを歩いた。思っていたよりも、ひたすら歩き続けるのはつらかったが友達と話したり、励ましあったりしながら歩き切った。お遍路には、お寺の人が飲み物や食べ物をお遍路さんに接待する「お接待」というありがたい習慣がある。これは、お寺の方のあたたかい心づかいであり、飲み物や果物を口にするにつかれた体が癒された。普段の生活ならば何も考えずにのどが渴いたら飲み物を口にするし、おなかがいっぱいなら食べ物を食べるが、お接待でいただいた食べ物を口にするときは、感謝の気持ちが湧いてきてありがたみを感じた。また、今回の大巡行には82歳のおばあちゃんが参加されていた。そのおばあちゃんはあるべく車を使わずに、自分の足で歩こうと頑張っておられた。おばあちゃんの一歩はとても小さくゆっくりとした足取りだったが確実に前に進んでおり、自然と応援したい気持ちになり、わたしも頑張ろうと思えた。おばあちゃんだけでなく、他の参加者の方々やゼミの仲間があきらめずに歩く姿を見て、気持ちが引き締まった。人の頑張る姿にやる気をもらえた一日だった。

◆6月21日

この日はいつもとは違うバス遍路であり、4年生の先輩方と一緒に参加した。今回は、お遍路ガイドの方が一緒に同行してくださり、小豆島やお遍路についていろいろなことをお話ししてくださった。バス遍路の行程は、「山の観音」、「観音寺」、「寒霞溪」、「田ノ浦庵」、「岬の分教場・二十四の瞳映画村」、「釈迦堂」、「明王寺」、「エンジェルロード」といったものであった。やはり歩きと違ってバスで回ると短時間で多くの場所を回ることができたし、体が楽だったが達成感はあまり感じられず、お遍路というよりは観光という感じだった。

「山の観音」には、本堂へ行くまでに真っ暗な通路を通らなければならなかった。暗いからと言われてはいたが、本当に真っ暗で何も見えず、進む方向さえわからずこわかった。迷いそうな気持ちになったので、勝手に前を歩く人の服の裾を軽くつかんで進んだ。本堂

ではおつとめをし、住職さんにお話を聞き、生姜湯をいただいた。「観音寺」は、初めてのお遍路で訪れたお寺なので2回目だった。このお寺ではお接待としてうどんをいただいた。お昼前でおなかが減っていたこともあり、おいしくいただいた。次に訪れたのは紅葉で有名な「寒霞溪」である。しかし、天気が悪かったためバスを降りたら一面が霧で覆われていた。せっかく寒霞溪で昼食の時間を取ったのに景色を見ることができず、とても残念だったが、休憩の時間が長かったのでお土産売り場を見たり、オリーブソフトを食べたりできた。オリーブソフトはさっぱりしていておいしかった。以前のお遍路のとき、大賀先生につくだにソフトクリームを買っていただいたが、このような小豆島の特産物を生かした珍しいソフトクリームを食べるのもお遍路をするときの楽しみであった。また、1億円の費用がかかったという公衆トイレも実際に使ってみた。確かに広くてきれいだったが、「1億円かあ、、、」といった感じだった。「田ノ浦庵」でおつとめをし、「岬の分教場・二十四の瞳映画村」を訪れた。ここは、小さいときに一度訪れたことがあったが、記憶がほとんどなかったもので、はじめて行くも同然だった。再現された教室を見たり、お団子を食べながらゆっくりしたり、竹馬に挑戦したりとしっかり観光を楽しんだ。観光で訪れていた年配の方々は教室の様子を懐かしがっていたので、忠実に再現されているのだと感じた。その後、隣同士にあった「釈迦堂」、「明王寺」でおつとめをし、釈迦堂では住職さんにいろいろな話をしていただいた。住職さんの学生時代の話もあり、自分の学生生活と比べて反省した。最後に、「エンジェルロード」を訪れた。エンジェルロードは、弁天島、中余島、小余島、大余島の4つの島々をつなぐように、干潮時に現れる砂の道である。丁度、干潮の時間帯だったので、道をわたることができた。道をわたったところにある小島には、願いを書いた多くの絵馬がかけられており、カップルにはぴったりの場所だと思った。ただ、私たちはカップルではないので魚をとったりして遊んだ。あの絵馬は増えすぎたらどうなるのだろうか。ひもが弱くなって、海に流れたりしないか少し心配だった。

特に印象深かった2日間について詳しく書いたが、どの回のお遍路も毎回違った発見ができた。最近若者のお遍路さんが増えているが、それでも私たちのような若い人がお遍路をするのは珍しいことだと思う。私もこのゼミに入っていなかったらお遍路をすることはなかっただろう。興味はあったが、やっぱりひとりで歩いて、般若心経を唱えるのには抵抗がある。しかし、今回ゼミで何回もお遍路を行いもっともって若い人々に興味をもってもらいたいと思った。小豆島遍路では、普段の生活で当たり前のことが当たり前ではなく、いろいろなものに感謝したり、人のあたたかさや大切さに気づいたりすることができる。友達と励まし合わなかったらくじけていたかもしれない。自分の足で歩いて、苦しい思いをした後の達成感をたくさんの人に味わってもらいたい。そして、また観光のときとは違ったすがすがしい気持ちで小豆島のすばらしい景色をみてもらいたいと思った。

(久保由希乃(香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その4

遍路に対するイメージは人それぞれ異なるであろう。私はこの小豆島遍路を体験するまで遍路を全くと言っていいほど理解していなかった。遍路が観光の一種になり得ることはもちろんのこと、遍路に挑戦する人の気持ちさえもそうである。特に私たち学生をはじめ、若者世代には完全に無縁のもので、年配の人たちが行うという先入観しか持っていなかった。しかし、この1年間、小豆島遍路を体験したことで今までにはなかった遍路の価値や素晴らしさを味わうことができた。楽しいことも多々経験したが、やはり苦労や困難の数は楽しさの何倍かわからないほどであった。人間は苦労を経験しなければ心を開くことができないということも存分に学ぶことができた。遍路に挑戦することで私生活の意識改革にも発展し、私自身にとってマイナス面は全く存在せず、何もかもがプラスに働いたと言える遍路であった。

私たちは1度だけバスでの遍路を経験したが、残りは全て歩いて巡礼した。遍路において「歩く」という動作は非常に重要かつ大変であった。この小豆島遍路のコースはアスファルトの道程も当然存在するが、それ以上に道の険しい山中や坂道という印象を持っている。それは私自身が苦労したことで、この苦労を真っ先に思い浮かべるからなのかもしれない。実際、小豆島遍路でのいちばんの印象は、「山道」といった子ども染みた答えも候補に挙げることができる。大学生の私たちの視点からすれば、大学に通う交通手段として徒歩の人は少ないであろうし、年齢を重ねることで歩く機会も減少しているはずである。さらに山道とくればなおさらである。この山道で特に苦労したのが、5月10日に参加した「ふれあい徒歩大巡行」における第81番札所「恵門の滝」を目指す最中である。奇しくもこの遍路が私たちの初めての遍路であり、最初にして最大の試練を迎えたと言える出来事であった。

この日は5月で、気候も遍路に挑戦するのに適していて、まさに五月晴れと呼ぶに相応しい天候であったが本当に大変であった。山頂まで約1300mの山道で、そして途中からは足場が安定せず、果たして「道」と呼ぶことができるかどうか分からないようなコースに1時間近く懸命に歩き続けた。足が引きちぎれそうになり、呼吸が乱れる。それでも頂上を目指したいがために、持っている力を全て使い切った。そして頂上に着いたのだが、やはりこのときの達成感は今でも忘れることはできない。また、それと同時に遍路の大変さを実感することが出来た。上記で紹介したように、この遍路は「ふれあい徒歩大巡行」ということで、私たちゼミ生以外にも一般の人たちも参加していた。その中には私よりもはるかに年配の人たちがこの試練に果敢に挑んでいたのだが、無事に全員到着することができた。私よりも断然負荷もかかるであろうし、厳しい条件にも関わらず懸命に歩いている姿には感動し、最後にはお互い声をかけあって賞賛した。このように、応援や到着時のふれあいは遍路において大切に、非常に清々しい気持ちになる。今思い返せば懐かしい思い出である。

苦しい思い出を紹介したが、遍路ならではの心温まる出来事もあり、それは遍路ならで

はと言える接待という文化であった。すべての札所で接待を体験したわけではないが、接待のありがたさを大いに実感した。遍路を始めた当初は、接待に対して遠慮がちであったが、この接待が遍路に挑戦している人に対するおもてなしということも学んだ。特に疲れきった私たちに飲み物等を提供してくれることで、元気を提供してもらい、体のみならず心も回復させてもらった。遍路は1人で寡黙に歩く修行だと感じていたが、1人では絶対に無理である。こういった接待があるからこそ、挑戦者たちは次の目的地へと向かうことができるのであって、人との出会いの重要性を再認識するきっかけとなった。巡礼中に出会った人たちは誰もが親切に接してくれ、遍路を支えてくれる必要不可欠な存在と言える。こうして私たちが小豆島遍路を実行できたのも、島の人たちが支えてくれたおかげなので、本当に感謝している。

思い返せば本当に数え切れないほどの思い出がよみがえってくるが、この思い出は友人と遊んだ思い出とは一味も二味も異なる。このゼミに入ることがなければ正直、小豆島遍路を体験してはいなかったかもしれないし、小豆島遍路の存在すら知らなかったかもしれない。遍路と言えば、徳島・愛媛・高知・香川の4県を含む四国八十八ヶ所巡礼が有名で、小豆島に八十八ヶ所の札所があることに驚きであった。しかし、小豆島遍路の自然の雄大さは十分に観光地として、その役割を果たしていると言える。頂上に到達したときに見渡せる瀬戸内海は美しく、何度も心を奪われた。また、農村地帯は緑が輝き、最高のグリーンツーリズムとして魅力的であった。そして、海のブルーと山のグリーンという両者のコントラストも巡礼中で疲れきった体を癒してくれた。自然の美しさは私たちに語りかけるかのように際立ち、遍路における自然の役割を感じ取ることもできた。これはバス遍路よりも歩き遍路で最大限に効果を発揮し、感慨深いものとなった。

1度だけバス遍路を行ったが、正直に言うと自然に関してはあまり味わうことはできなかった。確かにバスや自家用車等を利用した遍路は時間短縮に繋がり、さらには体に不自由がある人にとっては効果的な手段と言えるであろう。私自身、批判をするつもりは全くない。むしろ遍路は挑戦することに意味がある。ただ、健康状態に問題のない人たちには歩いて、実際に多くのものを見て感じ取って欲しいと感じた。時間にも余裕があるなら、自分自身を見つめ直すきっかけとなる。最近の若者が遍路に挑戦するきっかけとして、自分探しの旅といったテーマが理由として見受けられる。実際に体験したことで私自身、始める前とは考え方をはじめ、多くのことを学ぶことができた。これは挑戦した人の全員と言っても過言ではないであろう。

私は、歩いたことで足腰の強化や健康の増進にも繋がった。しかし、それ以上にやはり精神面の強化やチームワーク、向上心の上昇等、これからの進路にも活かすことのできる要素を得たが、正直、このような要素の発達に繋がるとは当初考えていなかった。ゼミで行うという「方針」に沿って参加していただけて、初回の遍路の時も、みんなで楽しく歩きたいという願望であふれていた。人間の本望として、楽をしたいという考え方が明確であった。こういった考え方が、恵門の滝で私自身の精神面の弱さを分からせてくれた。遍

路は楽なものではなく、武者修行なので甘い考えでは通用しない。挑戦するからには高い志も持って挑まなければならない。これは遍路のみならず、私生活における何事にも当てはまるであろう。回数を重ねるごとに遍路に対する楽しみや達成感を味わいたいという感情が芽生え、積極的に歩くように心がけた。また、ゼミ生で歩いたことにより協調性や友情も芽生え、助け合いのもと 1 つのグループとして成立した。全員が真剣に遍路に取り組み、歩いている姿は私自身も含め、それぞれが人として成長させてくれたはずである。

この 1 年間で小豆島には大変お世話になった。遍路道は整備が進んでいるとは言いがたいが、それもまた小豆島遍路の魅力と言える。今まで全くと言っていいほど縁のなかった小豆島を歩き、考えたことで小豆島の存在を理解できたような気もする。この思い出は一生忘れることはないし、一生の思い出である。何年後かに、ゼミ生で集まったときにはこの話題で必ずふれあうことになるであろう。私自身、非常に充実した遍路であり、これから社会人へとステップアップするにあたって貴重な体験ができた。この体験を絶対に無駄にはしたくないという強い志も抱いている。こういった機会を設けてくれた先生には本当に感謝しているし、小豆島が私を鍛えてくれたことにも感謝している。多くの困難、そして困難の中にも存在する楽しみや感謝、美しさといった、全てが入り混じった有意義な時間であった。

(武市佳久 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その 5

はじめに

今までに体験した小豆島お遍路についての感想を書く、というものであったが僕は例のごとく交通事故に遭い、合計 3 回しか小豆島に訪れることができなかった。参加できなかったことが残念であるのと同時に先生またゼミ生のみんなには申し訳なく感じています。小豆島遍路は 3 回しか訪れていなく、また大分前になるので覚えている範囲で書きたいと思います。

一回目

初回の小豆島は「お遍路大巡行」という小豆島遍路のイベントとして行われていたものに参加した。このときは小豆島のイベントともあつてか、行くときのフェリーにはお遍路に参加する人たちが多くいたのが印象的であった。またゼミ生のみんなも初参加ということで緊張と同時に不安が入り混じっているような雰囲気は少し感じられた。いざお遍路が始まる時には道を間違えるということがあり、お遍路をするにあたって慣れていないのが一般の人から見てまるわかりである感じだった。今回のコースは第 75 番から第 81 番であり約 16km という道のりであり相当長い距離であった。初めのほうは僕たちも余裕な感じでスイスイと歩いていたが、次第に足取りが重くなっていくのが感じられた。しかしながら一般に参加している人たちは汗はかいているが、どこかすがすがしい感じだったのが

印象であった。また歩いている途中ではなぜかタヌキに遭遇した。普段ではめったにみないので僕の中ではとても印象に残っており、このとき初めてお遍路は実際に歩くことで色々なものが見れたり、感じれたりするものだったと思った。

またこのお遍路でもうひとつ印象的であったのは「お接待」であった。今回はイベントもあってというのはあると思うがお寺で受けるお接待はすごくよかった。ただ単に食べ物や飲み物をもらうというのが印象的であったのではなくて、そのお寺ごとにいる人たちの対応がすごく温かみのあるものであったからである。疲れている時こそこういったお接待を受けるのは非常にありがたみのあるものであり、感銘を受けることができた。

このお遍路は初めてだったので、初めは正直嫌な気持ちがあったが、実際に体験すると意外に悪いものではないなと感じた。普段は体験できないことなので、非常に刺激のあるものだったと思った。

二回目

二回目の小豆島お遍路はイベントではないので、前回みたいにガイドさんや一般の人はいないので本当のお遍路というので初めてであった。この日の天気は雨のちくもりというのもあって、非常に不安な要素もあったがしだいに雨もあがり、歩きやすい環境であった。しかし行きの船は海が荒れていて、グラングランと揺れていたのは今でも印象的である。今回のコースは第1番から第9番のお寺を巡るものであった。

距離的にも前回と同様くらいのもので長距離であった。今回で印象的であったのは僕たちが読むお経にすこしずつ慣れてきたのと、天候の問題であった。お経はお寺ごとに読んでおり、前回からしていたことなので大分スムーズになってきたのが感じられた。もちろん初めのほうは声が小さかったり、すこしバラバラな感じがしたが段々とうまくなっている気がした。もうひとつの印象的であった天候の問題は雨のせいもあって途中で帰ることになったことである。一回目は天気は良かったが、今回は雨がふっていたので足取りも自然と重く、前回以上にしんどい気がした。特に今回は山道を歩くことが多かったので足もとにもきをつけなければいけないので身体だけでなく、心身も疲れた。しかしながらいざ山道を登り切ると山からみる景色は絶景であった。こういったものを経験することがお遍路のだいごみであり、お遍路ならではのものだと感じた。

三回目

今回のお遍路が僕が最後にいったお遍路であった。コースとしては第14番から第21番辺りを巡った。天気は良好であり、また今までとは違った環境であった。それは山道を歩いているときであった。野生のサルに出会ったからである。しかも一匹ではなく、行くときどきに何匹も見たのである。これは今までのお遍路のなかでも特に印象的であった。自然に触れ合うとはまさにこのことなのだと感じた。また今回も山道を登って行ったので、登り切った後の風景は格別であった。風景といっても行く場所で全然違ったものなので見

方も変わるし、見え方も違う。しかしどの風景も自分の足で歩き切ったこともあるので、なぜか満足感があつた。

三回目ともなるとお遍路になじみができて自然と歩くことにも慣れてきたのがあつた。お経もお寺につくと自然に読み、すごくやりやすかったのを覚えている。お遍路は体験すればするほどなじみが強くなり、また一回一回違った体験ができるので悪くはないと思った。

最後に…

冒頭でも述べたが今回訳あって数回しか小豆島遍路にはいけていないが、率直に述べると、はじめは正直嫌な感じがあつたし、あんまり楽しめないと思っていたが、いざ体験してみればあんがい悪いものではないということであつた。普段は体験できないことを経験できたり、心身共になぜかすがすがしいものになる。お遍路に若者が少ないのは実際に体験することがないからであり、一回でも体験すれば少なくとも少しは遍路に対しての考えが変わると自分自身の体験から感じた。

(津田裕太 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その6

四国の出身ではない私はこれまでお遍路に触れる機会はなかった。大学の講義で遍路に関する話を聞いたことはあつたが、その時感じたお遍路の印象は「ひたすら歩き続ける苦しい修行」、「中高年の方がするもの」といったものであつた。しかし、実際にお遍路を体験すると自分の中のお遍路に対するイメージや、さらには自分の考え方にも変化が現れてきた。

《5月10日》

小豆島霊場会が主催する「ふれあい徒歩大巡行」に参加した。土庄港に向かうフェリーの中には白衣を着て菅笠と金剛杖をもった方が大勢おり、こんなに多くの方がお遍路をしに行くとは思ってもみなかった。聞くところによると、県外からの参加者もあり、お遍路に対する関心の高さを感じた。集合場所の大聖寺に着くと早速お勤めが始まった。ゼミで事前にお遍路に関する学習をしていたがお勤めをするのは初めてだったので、一般の参加者が般若心経を読むのを目で追いかけるので精一杯であつた。

また、この日は各札所で缶ジュースやうどんなどの「お接待」をしていただいた。お遍路にはお接待があることは聞いてはいたが、実際にお接待を受けると、長い距離を歩いた疲労感を癒してくれるような人の温かさを感じることができた。

この日の行程は「第七十五番 大聖寺」から「第八十一番 恵門ノ滝」までの約 16km であつたが、最後の恵門ノ滝に登るまでの山道が一番きつかった。恵門ノ滝までの山道は 6 度の歩き遍路を通して最もきつかったように感じる。それまではどの参加者も会話をしな

がら歩いていたが、この山道では約 1 時間誰もが無言で登り続けた。私は、これこそが真のお遍路と言えるのではないかと感じながら歩いた。

恵門ノ滝までの行程はきつく苦しいものであったが、長い山道を登りきって目にする札所はとても荘厳で、目にするだけで何か御利益があるような感覚を受けた。さらに今回は、一般の参加者の方と話す機会もあり、お遍路に関する話をしていただいた。

初めてのお遍路はお接待で人の温かさを感じることができ、きつく苦しい遍路道で精神力・忍耐力を鍛えられたよい経験となった。

《5月17日》

今回は初めてのゼミ生だけでのお遍路となった。前回、ふれあい徒歩大巡行でお勤めの仕方が身に付いたので、札所に着くと鐘を鳴らし、お賽銭をしてお勤めをするという流れが自然にできるようになった。しかし、般若心経を唱えるときにはまだリズムに乗れずぎこちない感じの読み方となってしまった。札所によってはお参りに来たことを察してくれた住職の方が一緒に唱えてくれるが、自分たちだけだとなかなかうまく唱えることができなかった。

今回は「第二番 碁石山」への道のりが難所で、傾斜のきつい山を登らなければならなかった。しかし、前回の恵門ノ滝のことを思うとそれほどまでにきついとは感じなかった。それよりも、この日は時折小雨が降るあいにくの天気であったため、舗装されていない山道では踏み場を間違えると滑って転びそうな危険な状態であった。何日間もかけてお遍路をする人は当然雨の日にも歩かなければならない。雨の中歩くこともまた修行なのではないかと感じた。山を登り碁石山に着くと、小豆島の街並みと瀬戸内海を眺望でき、美しい眺めはとても気持ちがよかった。

また、「第三番 観音寺」で昼食を食べるとき、お寺の方にお茶とはっさくのお接待をしていただいた。温かいお茶が雨で冷えた体を温めてくれた。雨が降るというコンディションが悪い中でのお遍路となったが、雨の中の遍路もよい体験になったと感じた。

《6月7日》

「第二十番 佛ガ滝」から「第十四番 清滝山」への行程は約一時間歩き続ける坂道で、歩いている途中お遍路の団体と思われる観光バス何台かが通り過ぎて行った。バスが通り過ぎた直後はバス遍路を羨ましく思ったが、歩き遍路でしか味わえない体験もいくつかすることができた。

一つ目は、山道を歩いている途中に野生の猿に出会えたことである。私たちが近づいても警戒していなかったので、普段はあまり見ない珍しい動物を間近で観ることができた。二つ目は、小豆島の美しい景色をじっくり見ることができることである。バス遍路では一瞬で通り過ぎてしまう絶景のポイントも歩きながらじっくり鑑賞することが出来るのである。そして何より、つらく苦しい道のりを歩いて札所に辿り着いたときの達成感である。

バス遍路は安全かつ楽に札所を回れるメリットがあるが、時間と健康に自信のある人はぜひ歩き遍路を体験するべきだと感じた。

《6月21日》

今回はこれまでの歩き遍路とは違い、バス遍路を体験することになった。5月のふれあい大巡行で訪れた「第八十番 観音寺」では今回もうどんのお接待をいただいた。観音寺は火災で焼失した本堂が信者からの寄付によって再建できたので、そのお礼にうどんのお接待をするようになったという。

今回は札所巡りに加えて寒霞溪と二十四の瞳映画村、エンジェルロードという小豆島の有名な観光地にも訪れることができた。前回の遍路で羨ましく思ったバス遍路を体験したが、やはり精神力・忍耐力を鍛えられて達成感を味わえる歩き遍路の方が自分には合っていると再確認することができたお遍路であった。

《9月13日》

二度目の小豆島霊場会主催ふれあい徒歩大巡行に参加した。今回のふれあい徒歩大巡行には先達さんがおられ、私たちを率いて先頭を歩いてくれるだけでなく、各札所にまつわる話も紹介してくれた。なかでも私の印象に残っているのは、道中で弘法大師の足跡が残っている石を見たことである。私たちだけでは決して気づかないような場所にあったので、先達さんは遍路道を案内するだけでなくガイドもできるすごい人なんだと尊敬の念を抱いた。

《10月25日》

ゼミ生だけでのお遍路は約4カ月ぶりだったので、お勤めも最初の方の札所ではややおぼつかない感じであった。徐々にうまくリズムに乗って唱えられるようになったが、やはりうまく唱えられなくてもお祈りする気持ちが大事なのではないかと感じた。「第二十五番 誓願寺庵」から「第二十七番 桜庵」までは旧遍路道を通って行っただが、この道がとても歩きづらい道であった。足元はドングリや落ち葉で滑りやすく、頭上には至る所にクモが糸を張っていたのである。

旧遍路道を歩くと昔のお遍路さんになったような気持ちで歩くことができるが、昔のお遍路さんはこんなに危険で歩きにくい遍路道を通り、命懸けで札所に辿り着いて祈願していたのだと考えると今の私たちはとても恵まれた環境に生きているのだと感じた。

《11月29日》

今回の遍路では自分が先達の一人として他のゼミ生を札所まで案内する役目を与えられていた。一週間前からどの道を通って札所を巡るかの打ち合わせをしていたが、実際に現地に行くとどの道を行けばよいのか分からず何度も道に迷ってしまった。本当の先達の方

は地図を少し見ただけで札所へ連れて行ってくれていたのも、そのようになるまでに先達の方たちは何十回も遍路を経験したのだと考えると絶間ない努力の積み重ねなんだなと感じた。

さらに今回は小豆島の紅葉の時期と重なっていたので、瀬戸内海を背景にした見事な紅葉の景色は感動という言葉が当てはまるほどの美しさであった。

《まとめ》

7 回の遍路を体験して、遍路は自分を変えてくれるものであるということを実感した。1 回目、2 回目の遍路では「今日はどのくらい歩くのかな…」という考えが先に浮かんでいたが、5 回、6 回と数を重ねるごとに徐々に苦しい道でも「これを歩けば新しい自分に出会える！」というプラスの方向に考えることができるようになった。また、お接待を受けることによって、いつも見返りを求めていた自分から、「人のために何かできないか？」という考えを持つようになったことが自分の中では一番変わったと思う。

小豆島遍路は島の方が遍路道の草を刈ったり、階段に手すりを設置するなどの整備によって支えられている。しかし、ふれあい大巡行に参加への若者の参加はほとんど見られないため、今の若い人はお遍路に対する関心が薄いのではないかと感じた。若い人がお遍路に関心を持たなくなれば小豆島遍路はなくなってしまうので、若い人にいかに関心を持ってもらうかが小豆島遍路の課題であると感じた。

自分を少しでも変えてくれたお遍路に感謝し、来年も機会があれば是非参加したい。そして、少しでも小豆島遍路を全国にアピールできたらと思う。

(徳島 也 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その 7

はじめに

私は、小豆島お遍路が初めての歩きお遍路の体験であった。私は香川県出身であるため四国お遍路をしている人を見かけることがあった。このため、「お遍路とはどのようなものだろうか」という関心を持っていたが、遍路をしている人には年輩の方が多く「年輩の方のもの」というイメージがあり、お遍路をしたことは無かった。そして、規模は四国遍路に比べて小さいが小豆島でお遍路ができるということで参加した。

一回目

大聖寺、三暁庵、歓喜寺、金剛寺、藤原寺、雲胡庵、薬師寺、観音寺、恵門ノ滝

今回はふれあい大巡行に参加してのお遍路であったためゼミのメンバー以外にも約 20 人の参加者がいた。その多くが年輩の方であった。

初めてのお遍路ということで、何をどのようにしたらよいか分からなくて、他の人の行動を見て真似をするしかなかった。また、お経も最初はなかなか上手くよめなかった。

さらに歩くペース配分もわからなく最後の方は疲れていて、そのうえ恵門ノ滝まで最後の約 2km は上り坂であったため、到着して少しの間しんどくて喋れなかった。そして、帰りのバスのでは疲れのあまり寝ていた。

二回目

札所は庚申堂、常光寺、向庵、碁石山、洞雲山、隼山、観音寺、古江庵

草壁港から地図を見ながら歩き始めた。途中、道を迷いながらも予定通り札所に行くことができた。お昼ご飯を観音寺で食べた。そのとき、お寺の人がミカンとお茶をお接待してくれ、うれしかった。見ず知らずの人に優しく接することは、なかなかできないことである。

お昼ご飯の後、雨が降り始めたためこの日のお遍路は中止になった。

三回目

佛ガ滝、清滝山、石門洞、清見寺

草壁港から猪谷のバス停までバスで移動しそこから佛ガ滝へ歩き始めた。佛ガ滝にて先生が木魚を購入し次の清滝山から、お経をよむときに木魚を使った。やはり、木魚の音があった方が、雰囲気のでいい感じであった。また、清滝山に行く途中野生の猿に遭遇した。清滝山へ行った後は石門洞へ行き、その後バスで清見寺へ寄り、そこから歩いて草壁港へ戻った。

佛ガ滝、清滝山、石門洞の三つの札所では、お本堂が自然を利用して造られていた。佛ガ滝のお堂は洞窟の中に、清滝山と石門洞は岩壁に造られていたのが、とても印象的であった。

四回目

吉田庵、福田庵、雲海寺、本地堂、当浜庵、海庭庵、楠霊庵、岡ノ坊、常光寺

今回の遍路はふれあい大巡行に参加した。今回の参加者も年輩の方が多かったが、小さな子供も二人参加していた。スタート地点の吉田庵まではバスで移動し、吉田庵から歩き始めた。しかし、いきなり吉田庵から次の福田庵へ行くには山を越えなければならなかった。まだ歩き始めということで体力に余裕をもって福田庵に到着した。その後、雲海寺、本地堂、当浜庵、海庭庵、楠霊庵と順調に歩き、行く札所が残り二つになった。楠霊庵から岡ノ坊へ行くには、また山を一つ越えないといけなかった。やはり、一日に二回も山を越えるのは、大変であった。

五回目

安養寺、誓願寺庵、桜庵、阿弥陀寺、風穴庵、正法寺、誓願寺

今回は先達を任された。道に迷わないように、あらかじめ地図で札所の位置などを確認

したが、初めて通る道であったため、迷わないで行けるか不安であった。

草壁港をスタートして安養寺、誓願寺庵、桜庵、阿弥陀寺へは、親切なことに道標や標識があり、迷うことなく行くことができた。

しかし、不安は的中した。阿弥陀寺を出発し、薬師堂へ行く予定であったが、途中で道を間違えて行く予定していなかった風穴庵へ着いてしまった。その間違えて進んだ風穴庵までの道は山道で大変であった。道を間違えてしまったため、今回訪れた札所の他に行く予定にした札所があった。しかし、そこへ行くと帰りのフェリーの時間に間に合わなくなるため行くことができなくて、少し残念であった。また機会があれば行くことができなかった札所に行ってみたい。

さいごに

お遍路をした感想は、一日 10km 以上歩くときもあり、とても大変だった。しかし小豆島遍路に挑戦できて良かった。般若心経をよんだこと、普段は誰も通っていない山道を歩くことなど普段できないことをお遍路で体験できた。また、ふれあい大巡行の参加者、各札所にいた人、一緒にあるいたゼミのメンバーなど多くの人にも出会うことができた。

このような体験をして、はじめ、遍路は「年輩の方のもの」というイメージがあったが、イメージだけで決めつけてはいけない。やはり、実際に挑戦してみることが大切だと実感した。再びお遍路ができる機会があれば挑戦したい。

(西山優樹 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その 8

大賀ゼミの小豆島遍路では、全ての札所を巡ることはできていないが、全 7 回の区切り打ちを行うことができた。区切り打ちを重ねる毎に小豆島遍路に対する興味や疑問が増し、同時に小豆島の観光や、まちづくりにも小豆島遍路を絡めていくことはできないのだろうかと思うようになった。今回のレポートでは、小豆島や小豆島遍路に関するデータ等が少ないために、全 7 回の小豆島遍路区切り打ちを体験しての自分やゼミ生の体験記を基に、小豆島遍路を体験しての報告をしたいと思う。

a. はじめに

まず、お遍路と聞くと、白衣を羽織り、菅笠を被り、金剛杖を持ち札所を巡るというように宗教的なものであるというイメージがある。しかし、ゼミに入り小豆島遍路をすることに対して、宗教的な気持ちは一切なく、大賀睦夫教授の『四国のスピリチュアル・ツーリズム』(2008)において、歩き遍路動機の「挑戦」と分類されたケースに当てはまる、挑戦的・スポーツ的・オリエンテーリング的な感覚で小豆島遍路に挑もうと考え、小豆島遍路を行った。よって、お遍路に対して宗教的なイメージが強いが、宗教的感覚でのお遍路というより、スポーツ的な感覚のお遍路として小豆島遍路に取り組んできた。

b. 小豆島遍路を通じて

全 7 回の区切り打ちを通じて、自然の中を歩き、人とふれあい、沢山のことを感じ、人間的に成長できた。お接待を受けた時の何とも表現し難いありがたさ、お遍路ならではの神秘性、お遍路を終えた時の心地の良い疲労感と達成感はまさに小豆島遍路をしてみないとわからない、いや、感じることでできないものである。以下では上記に挙げた点などについて感じたことを述べていく。

c. お接待

人やコンビニ、自動販売機すらない遍路道をひたすら歩き、疲労を感じている時に、お茶やみかん等をお接待していただいた時は、「見ず知らずの者にここまでして下さるとは何とありがたいことなんだ」と感動し、お茶の一杯でもこんなに嬉しいものなのだと初めて気付かされた。そして、お接待を受けたものの自分にできることと言えば、感謝することしかできないということも感じた。お接待はその人の気持ちであり、労い、思いやり等いろいろな思いが込められている。お接待を受けた時、もちろんお茶やみかんはありがたかったが、それ以上にお接待をしていただいたというありがたさを実感した。講義などの座学でいくらお接待やおもてなしというものを学んでも、それは表面的なものであり、お遍路をしてお接待を受けて初めてお接待とは言葉に表すことのできない、受けた者にしか分からないものであると感じた。

d. 非日常性

小豆島遍路には、洞窟の中に入る札所もある。普段、街で建物に囲まれて生活している自分にとって、自然の中にある札所はまさに非日常の世界であるが、洞窟の中でお勤めをするという事は更に神秘性を感じた。薄暗い洞窟の中に入ると、お線香の香りが立ち籠め、ひんやりとした空気を感じる。そんな中で、護摩を焚きながらお経を読むということは日常生活で体験できることだろうか。住職が護摩を焚いている時に炎を見ながら、薪が燃える音、太鼓の音、皆のお経を読む声が洞窟内に響いているのを聴き、不思議な気持ちになりながらもお経を読む。小豆島遍路にいくつかある洞窟の中の札所は、他の札所よりも味覚以外の視覚、聴覚、嗅覚、触覚で非日常性を感じさせ、同時に神秘性を感じさせることができるのである。それだけ洞窟内の札所は、人々を神聖なものと感じさせる何かがあり、加えて護摩を焚くことで、より神聖さ非日常さを際立たせているのであると感じた。

e. 充実感・達成感

小豆島遍路は四国八十八か所に比べると距離も短く、短期間で巡礼できる。しかし、区切り打ちでも一つの区間で十数 km 程あり、かつ四国に比べると当然ながら小さい島であるため傾斜のきつい道のりが続いている。それは、ゼミ生が毎回帰りのフェリーに乗ると疲れた表情を見せたり、次の日に体の痛みを感じたりしていることからわかる。お遍路は、アスファルトの道だけでなく、足場の悪い道のりも歩き、時には帰りのフェリーに間に合うために急ぎ足で歩いたりと肉体的にかなりつらい時もある。しかし、日頃運動不足の自分にとって、お遍路は自然の中を地図や標識を参考にして目的地まで歩くというオリエンテーリングを一日中やったような感覚で、良い運動になっている。そして、お遍路を終えると充実感や達成感というものを感じ、疲れていてもどこか心地よい感じがする。お遍路は疲れはするものの、それ以上に肉体的にも精神的にも満たしてくれるものであると思う。

f. 遍路道

今の遍路道は自然の中にある、昔からの遍路道以外にも新しく舗装された道も遍路道として利用されている。舗装された道は道路標識や地図を見ると現在地の予測がしやすくルートも検討しやすい。また、舗装された道では自然の中にある道に比べて、道の泥濘等の障害物となるものが少ないなどのメリットがある。しかし、舗装された道は長時間歩いていると足に負担がかかるなどのデメリットもある。このように、遍路道からいろいろ感じることがあるが、小豆島遍路を通じて一番強く感じたことは、昔のお遍路さんは今以上にお遍路をすることが大変だったであろうということである。昔のお遍路さんは、地図もなく標識のみを頼りに歩き、時には追剥や野生の猪や猿、野犬に遭遇したり、道に迷ったり、雨や風で行く手を阻まれたり、怪我、病気をしたりと常に危険と隣合わせだったであろう。現在は道も整備され、いざという時は携帯電話で連絡できたりと昔に比べれば格段にお遍路での危険性は低くなったのではないと思う。昔のお遍路さんのように歩き遍路をしていても、私達はとても恵まれた条件下でお遍路をしているということに気付くことも重要ではないだろうかとお遍路を通して感じた。

g. 観光としてのお遍路

全 7 回のお遍路のうちの 1 度バス遍路を体験したが、道中でバスガイドにいろいろと説明などされると、目的地は札所なのにどこかお遍路という媒体を用いた団体旅行のような感じがした。「札所に着けば、バスを降りて境内に入る」ということと、「京都の有名寺院に着けば、バスを降りて境内に入る」ということとあまり違いがないように感じるのである。前者の場合「お勤め」を行うが、遍路は札所ではなく歩いてきた道のりが重要であるという「遍路は道なり」という言葉からも、お遍路は道中が重要であると思う。よって、

歩き遍路は道に重きをおき、バス遍路は札所に重きをおいていると言えるのではないだろうか。このように考えると、歩き遍路を行っている者からすればバス遍路はお遍路ではないように思う。しかし、お遍路を行う動機が多様化している中、「観光としてのお遍路」も広義でお遍路と言わざるを得ないのではないだろうか。小豆島観光協会の資料によれば平成 4 年から現在まで小豆島を訪れるお遍路さんは年々減少しており、四国八十八か所の人気に比べて影をひそめている。このままでは遍路道の整備など、お遍路に様々な問題が生じ、更に小豆島遍路の存続が危ぶまれるのではないだろうか。小豆島遍路では大型バスなどの入れる道は限られているが、近年「まち歩き観光」といった個人や少人数単位での体験型観光も人気があるので、このようなニーズに対応できるよう札所を中心とした「まちづくり」を行うことが小豆島遍路や、小豆島にとって理想的な将来を生むのではないかと思う。歴史的な意味での「巡礼としての遍路」だけでなく、時代やニーズの変化から「観光としての遍路」などいろいろな意味で遍路を考え、後世に残していかなければならないと「歩き遍路」、「バス遍路」を通して感じた。

h. 最後に

このように小豆島遍路をしてみて気付くことや感じたことは上記以外にも多数あるが、やはり、実際に試みることでゼミに入る前と今ではお遍路に対する考え方や見方は少しずつではあるが変わってきている。また、全ての札所を打てていないが、少しずつお遍路について分かりはじめ、視野も広がり、お遍路に関するいろいろなことに興味を持ちつつある。まだまだ、お遍路に疑問に思ったり気付く程度で止まっているので、これからは体験という姿勢ではなく、もっと深く調査していくという姿勢で取り組んでいきたいと思う。

(野口浩輝 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その 9

2009 年 5 月 10 日。私は人生で初めてのお遍路体験をした。この日は小豆島遍路をツアーのような感覚で体験できる「小豆島ふれあい大巡行」にゼミ生と大賀先生とともに参加し、16.5km の道のりを歩いた。お遍路と言うとお寺を歩いて巡っていくものというくらいの知識しかなかった私たちにとって、初めてのお遍路体験は戸惑いの連続であった。まず、「般若心経」。お寺の方が読むお経に続いて自分も言ってみるが、全くリズムについていけず、しどろもどろであった。また、歩くということも私たちが想像していた以上に過酷なもので、舗装されたコンクリートを歩くだけでなく、そのほとんどは坂道、山道で何度も心が折れそうになった。この日 1 日を終え、帰りのフェリーではもう何も食べれないほど疲労していたのを覚えている。

次に私が参加したのは、2009 年 5 月 17 日。この日は、急斜面名山道と突然の雨で、前回よりも厳しいお遍路となった。この日印象に残ったのは「お接待」である。「お接待」とは、遍路独特の文化で、寺を巡礼するとき、その寺の方からお菓子や飲み物、フルーツな

どが貰えるというものである。このお接待には、長い道のを歩いているお遍路さんへの
労いの気持ちが込められていて、お接待を受けるということは、単に疲労を回復できるだ
けではなく、その地域の人々の温かさに触れることができる。この文化は私がお遍路をし
ていて最も心に残るものである。

第 3 回目のお遍路は最初のお寺までバスで向かった。この日最大の難所は第十八番札所
の石門洞へ向かう道のりであった。看板には「石門洞 700m」書かれていて、近いと思われ
たが、その道のりはこの日一番の急斜面で、今までのお遍路の中でも最も厳しい道のり
であった。前へ進もうとしても坂がきつく全然前に進むことができなかった。登っても登っ
ても続いていく坂道に何回も心が折れそうになったが、女子 3 人で励ましあいながら男子
のスピードに負けないように必死で登った。今度は上ってきた急斜面を下って行き、バス
が来るまで 1 時間ほど休憩していると、「ホーホケキョ」という鶯の鳴き声がした。普段の
生活の中で鶯の鳴き声などほとんど聞いたことがなかったので、生の鶯の鳴き声に感動し、
小豆島独特の魅力を再発見できた。

第 4 回目の遍路に私は参加することができなかったのだがこの日はいつもの歩き遍路と
は違い、「バス遍路」をした。お遍路にバスと聞くととても驚くが、最近では、歩き遍路の
他にも自分の車で遍路をしたり、バスを使ったりする少し近代的な遍路の形も広がってき
ている。この日参加した者の体験記によると、お遍路ガイドさんが巡礼に同行し、事前に
札所や遍路道上での情報や見どころを教えてくださいるのは、遍路の道中をより楽しくする
ものであるように感じられた。特に私たちのようなお遍路にあまり詳しくない者が最後まで
お遍路をやり遂げるには、こうした行く先々での楽しみや期待感が非常に大切なものと
思われる、と記されている。

第 5 回目は 9 月 13 日。この日は 2 回目の「ふれあい大巡行」であった。この日も残念な
がら私は参加することができなかったのもので、参加した者の体験記から書かせもらいたい。
この日の遍路は、夏休み中で、久しぶりのお遍路だった。吉田庵や当浜庵のお遍路さんに
聞いてはいたが、この日の遍路は福田庵までの厳しい道のりだけではなく、岡ノ坊までの
道のりもとても長く、きつい道のりをひたすら黙って歩き続けた。今回の遍路は想像以上
にしんどいものとなったが、お遍路体験を重ねていくうちに、遍路自体にやりがいを感じ、
大学生のうちからお遍路を体験でき、また手厚いお接待も受けることができ、とても恵ま
れていると感じた。本や講義でお遍路について学んだりもするが、実際にお接待を受けたり
することで、遍路について知ることのほうがより良い思い出となり、遍路の良さを回を
重ねるごとに強く感じるようになった。

第 6 回目には私も参加することができた。久しぶりのお遍路だったがこの日はお遍路に
行くのがとても楽しみだった。この日は私が体験した中で最も疲れた 1 日となった。厳し
い山道にはいつも頭を抱えるが、山頂にたどり着いた時見渡す小豆島の絶景は本当に疲れ
を吹き飛ばしてくれる。険しい山々を登って行くうちに、心身ともに強くなっているよう
に感じる一方、本当のお遍路さんはこのような道のりを孤独と闘いながら登っているのか

と思うと、その精神的強さを尊敬した。今回の巡礼が終わってみて、回数を重ねるうちに次第に周りが見えるようになり、今までは考えもしなかったお遍路をする方々の気持ちや、島の風景も見たり、考えたりするようになり、島のスピリチュアルツーリズムというテーマに近付いていると感じた。

小豆島遍路も回数を重ねていくうちに周りとの会話を楽しんだり、小豆島の魅力を感じながら歩けるようになっていった。特に 1 番印象に残っているのは山頂から見下ろす小豆島の風景で、この景色を見ると何とも言えない達成感を感じた。

私がお遍路体験を通じて感じたお遍路の魅力は、**1. 困難を乗り越えるという経験**ができることである。お遍路をやり遂げた日の達成感は言葉では言い表せないほどで、1 日がとても充実したものになる。これは日常から少し離れたお遍路だからこそ体験できるもので、この積み重ねが大きな自信へとつながる。次に **2. 普段はあまり交流も持たないような年齢層の方々と話ができる**ことである。ふれあい大巡行では、80 歳のおばあさんと会話をしながら歩いたのだが、普段あまりお年寄りの方と接する機会のない私にとって、会話の一つ一つが新鮮でおもしろかった。他にもお遍路には老若男女問わず様々な人が参加しているので、その人たちと会話することは自分の視野を広げてくれた。次に **3. 自分の成長が目に見えて分かる**ことである。例えば最初はしどろもどろだった般若心経も、何か所もお寺を回っていくうちにリズムに合わせてフレーズフレーズで読めるようになり、ある程度は紙を見なくても読めるほどに成長した。また、険しい山道も、友人との会話を楽しみながら、だんだんとスピードを上げて進めるようになる。このように身を持って、お遍路を通じた自分自身の成長を確認することができる。このようにお遍路には様々な力や魅力あふれている。

お遍路の年齢層について、何かしら人には言えないような悩みを抱えているような人、定年退職しお遍路をしてみる人、人から勧められてお遍路をする人、理由は一人ひとり異なっているが、年齢層はやはり 60 代以上の人たちがほとんどである。私は自分の体験を通してもっと若い人たちにお遍路体験をしてほしいと思う。私もそうだったのだが、お遍路となじみの薄い 20 代や 30 代の人たちにとって「お遍路＝苦行」というイメージが強く、お年寄りのやるものだと考えている人も少なくはない。そこでもっと若い世代の人々に、若者だからこそ経験できるお遍路の魅力、若者だからこそ経験しておくべき遍路について私自身の経験を生かして広めていきたいと思う。また、小豆島遍路に関して若者目線で考えてみると、お遍路＝歩くという考えを少し緩めてみるのも良いかもしれない。第 4 回で行ったバス遍路もその方法の一つだと考えられるが、まず若い人たちに興味を持ってもらうという意味では有効ではないだろうか。もう一つ私が遍路をしていて感じたことは、遍路の道中で出会う美しい自然や、小豆島の名物を遍路の風物詩として考えてみるということである。私自身、お遍路をしていて楽しかった思い出というのは、みなでのお昼ご飯を食べていたり、小豆島名物佃煮ソフトやオリーブソフト、すももソフトを食べたことである。私たちのような年代の人たちにとってこのような楽しみがお遍路をしていく上で大き

な力になるのではないだろうか。今後若者お遍路さんが増えてほしいと思う。

(浜西実咲 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その10

私はゼミを通して、この1年で7回の小豆島遍路に参加した。春夏秋冬の小豆島と多くの人たちとの交流があったこともあり、一言では語れない思い出も多くある。その中でも、今回の体験記では「遍路道」「バス遍路」「景観」「般若心経」「ヒトとのふれあい」についてまとめていきたい。

<遍路>

遍路をするにあたって、重要な要素が2つあることに気がついた。

1つ目は歩くペースの重要性である。

小豆島遍路は四国遍路に比べて距離は短いものの、道中には起伏の激しいポイントもある。山岳霊場を訪れる時には、煩惱とよばれるものを考えさせる余裕を与えないこともしばしばで、時には手すりが設置されている急勾配にも立ち向かわなければならない。

また、雨の日になると遍路の厳しさは一層増すといえるであろう。なぜならば、傘をさしていると両腕をしっかりスイングして歩けないため、ペースも遅くなり、傘を持つ手に疲労が蓄積しやすくなる。それだけではなく、地面のあちこちにある岩が滑りやすくなっており、一時の油断が大けがに繋がる場合も少なくない。私は金剛杖を持って遍路へ行くことはなかったが、傘は雨を防ぐための本来の役割だけではなく、時として杖となり3本目の足にもなった。このことが、金剛杖の存在がどれだけ道中の安全性を高めるかを感じるきっかけになった。

しかしながら、晴れていれば問題ないのかと言われればそうとも言い切れない。遍路道の中にはアスファルトで舗装された車道であることもしばしばある。真夏の暑い時期ともなれば強い日差しの上にアスファルトの照り返しで、膝への負担や熱中症、脱水の危険性が高まるのである。一見、歩きやすそうな車道ではあるが、ゴツゴツした自然の岩があったとしても、大自然の営みが作り出す影と土の柔らかな地面のおかげで総合的に遍路道のほうが歩きやすいことがわかった。

2つ目はルートの重要性である。

遍路というものは主に、哲学的に「道（人生）に迷った」という人が行うことで、真理に近づいたり、自らの精神を鍛練したりする場であると言える。しかしながら、こうして本当の意味で自身が道に迷ってみると、遍路というものに対して純粋な恐怖感を覚えた。この時は、不安だらけの遍路道の先に札所があったからよかったものの、「道に迷う」というのは笑い話のようにみえて当事者としては全く笑えない、そんな心持ちであった。

<景観>

小豆島の魅力は山の中腹ならば左右でその景色が千差万別、山と海とが同時に見えることである。遍路の途中で巡り会ったたくさんの景色は、遍路道を抜けた時の開放感を伴って今でも記憶に残っている。夏の海は空が高く、そして青く、空間的な広がりを感じた。一方で秋の山々は紅葉で赤く彩られ、行く先々で大小さまざまな紅葉に出会った。手入れされた大学のイチョウや遠目に見える紫雲山のそれには見向きもしないのに、どうしてこんなに紅葉の写真を撮ったのだろうと気づいたのは、その日の遍路が終わってからのことであった。

遍路を通じて、非常に印象深い風景に出会いました。それは、一面が霧に覆われた寒霞溪である。端的に言えば何も見えなかっただけなのだが、景勝地として有名な寒霞溪から全く不可視であることの新鮮さに特別なものを感じた。

<バス遍路に対して>

バスや乗用車を使った遍路のあり方に対して、私を含めた多くの人が不快感まではいかないまでも、ある種の怪訝な思いに駆られるかと思う。バス遍路との遭遇した時「そんなことをしても功德は得られない」という対抗意識は少なからず有していた。それは、ラクしたいなあという羨望に由来するものではなく、遍路の本質をはき違えているみじめさをバス遍路に感じたからであった。けれども、フェリーや港までの距離の関係でバスやタクシーを利用した際、やはりラクでトクした気分になってしまったのも事実であった。自分が歩いているときに抱いた感想は棚に上げて、都合のいいときだけ肯定するというのは、後で振り返ると複雑な思いに駆られるばかりである。

そんなバス遍路に対して、確かに言えることが2つある。

1つは乗り物酔いの過酷さである。小豆島遍路では前述のように激しい起伏や山岳霊場があるため、バスは想像以上に揺れる。私は乗り物酔いしやすい体質であったため、バス遍路では案の定都合の悪いことになった。車内では「早く着け、早く着け」と切実に祈ったのを今でも鮮明に記憶しており、バス遍路は2度と御免被りたいと思っている。四国遍路も含めてバス遍路の参加者たちは、酔った時、もしくは酔い止め対策として何をしているのか、死活問題となった私にとっては非常に興味深いところである。

2つ目はやむを得ずのバス遍路が存在するということである。例えば、足の悪い人や高齢者、そのほか心身に何らかの障害があって歩き遍路が困難な場合であるにも関わらず、死者の供養や精神修行でどうしても巡行したい人たちにとっては、バスや乗用車での遍路は有効な手段であると言える。そう考えると、ただ漫然と歩き遍路以外を否定してしまうは思考として危険であり、むしろ自身が歩くことができることに喜びを感じることが大切だと思う。若さというのはそれを当然に備えている場合が多く見失いがちではあるが、こうした姿勢が社会の中において他者理解へと繋がっていくのではないかと思った。

<般若心経>

小豆島遍路を通じて初めて般若心経に触れることになったわけだが、その内容は漠然としたイメージでしか頭に入っていないのが現状である。そんな中で分かったこともあり、それは主に3つの事柄が挙げられる。

1つ目は集中できることである。

視覚的には漢字の羅列でしかない般若心経を、弘法大師は中庸な声とテンポで読むべきであると教えている。ふれあい徒歩大巡行の参加者の中には独特の抑揚を披露なさる方もいたが、少なくとも私は不慣れなのと疲労とで経を目で追い口に出すので精一杯であった。それが自然と集中力を高めたと言えるかもしれない。

2つ目は慣れれば上手になることである。

当初はリズムや読み方、文節のように区切る箇所が分からなかったため、みんな自信がなく小声であったり、1人が飛び出したりしていた。けれども、回数を重ねるごとにコツを掴んで、小豆島遍路も7回目を数える頃には逆にソラでよめる部分も出てくる程にまになった。当たり前のことのように感じるかもしれないが、ここまで上手になるとは当初から考えると想像し難いと言っていいだろう。

<ヒトとのふれあい>

遍路でヒトとのふれあいを語る上で、お接待の存在を無視することはできない。

ある時は札所の人に飲み物をいただき、またある時は「お遍路さん、どうぞ」と外にみかんが置いてあることもしばしばあった。ふれあい徒歩大巡行で観音寺を訪れた時はうんのお接待があり、ひどく驚いたのも記憶に残っている。お接待を受けるというのは非常に嬉しいものであったが、こうした気持ちを伴った純贈与が無くなりつつある社会において、お接待はもはや文化の領域にある学問だと位置づけてもいいであろう。

小豆島遍路ではもう1つ、ヒトとのふれあいについて考えされることがあった。それは再会の喜びである。ふれあい徒歩大巡行は年に2回開催されるが、一期一会が基本の遍路とは違って、遍路ツアーでは何度も参加する人たちもいるため、再会の可能性が高いといえます。私の場合は、第1回の大巡行で先頭を一緒に歩いた地元の男性と、第2回で再会することができた。道中では前回の遍路の思い出話や、誕生寸前の民主党政権に対する期待や不安について大いに意見交換できたと思う。歩き遍路は修行であることを意識して黙々と歩くことも大切なかもしれないが、おじさんとの世間話はコミュニケーションの新しい場所としての歩き遍路を認識することができた。

ちなみに、第2回のふれあい徒歩大巡行には10歳前後の子どもも参加していた。小さな体に身長に合った金剛杖を持ち、騒いだりすることなくしつかりとした足取りで歩く姿を見て、私を含めた多くの大人たちの心が揺れ動いたのではないだろうか。

<まとめ>

ここでは、第7回小豆島遍路で名言看板に出会った時の話で結びたいと思う。

名言看板とは8コースの佛谷山参道に立てられている、佛谷山の住職が書いた名言のことである。看板は全部で10近くあったが、その中で私が特に気に入ったものがあります。「下みれば我に勝りし者はなし、笠とりてみよ空の高さを」

私たちはきっかけがどうであれ、お遍路の世界と関わりを持ったことで仏教的な思想だけではなく、自然の美しさや自身が健康であることの大切さを知ることができた。下という概念がお遍路前の自分だとしたら、きっと今の方が充実した生活をしていると思う。しかしながら、小豆島遍路の全コースを制覇したわけではない上に、世の中には何十回もの巡行を達成している人たちも存在する。空は高く、自分にはまだまだ登るところがあることにも気づかされた。

お遍路に終わりはしないのではないかと思う。霜月の末日にもかかわらず、満員で地べたに座るしかなかった帰りのフェリーや、遍路の翌日に階段の上り下りを妨げる筋肉痛。こうした日々の生活をも含めたすべてでさえも、お遍路の一環なのだとということである。

(水野晃浩 (香川大学経済学部学生))

お遍路体験記その11

これまでバス遍路も含めると合計で7回小豆島遍路を行ったが、遍路をする前とした後に自分に起こった変化や、それぞれの遍路で印象に残ったことを、まとめとして以下から述べていきたいと思う。

今回の遍路で印象に残ったこととしてまず挙げられるのが、小豆島の景観である。小豆島から眺める瀬戸内海は、どのコースで行った時もそれぞれ違った様子で楽しむことができた。コースの中には、小豆島の町並みと瀬戸内海を見下ろせる絶好の場所が数多く存在していて、それを探しながら遍路を行うことは、私の一つの楽しみでもあった。そのような場所を見つける度に、それまで歩いてきた疲れを一時的に忘れられ、精神的に一度リセットした状態で再び遍路に臨むことができた。また瀬戸内海だけでなく、小豆島自体にも多くの素晴らしい景観があった。特に印象に残っているのは、7回目の遍路の時に第四十二番札所の西ノ滝で見た紅葉である。何故印象に残っているのかというと、最近行ったからというものもあるが、やはりその紅葉の美しさに惹かれたからである。遍路をした時期がちょうど紅葉の季節で、西ノ滝以外にも紅く色づいた山は何度か見かけることができた。しかし西ノ滝の紅葉は、それら他のものとは違い本当に鮮やかな紅色で、またそれを間近で眺めることもできたため、非常に感動した。さらに紅葉の中にはお寺がひっそりと佇んでいて、その寂寞とした様子はどこか神秘的な雰囲気醸し出していた。「趣がある」という言葉はよく聞くが、それはまさにこのようなことを言うのだなと心の底から思うことができる風景だった。

4 回目の小豆島遍路は、いつもと違いバスを使った遍路であったが、このバス遍路をしていて私は気付いたことがある。それはバスから見た景色と、歩きながら見た時の景色の感じ方の違いである。バスで遍路をしている時、私の乗るバスがたまたま 3 回目の時に歩いた道を通った。歩いた時は何十分もかかったのに、バスで通るとたった数分の距離だった。そして私は歩いた時と同じ、瀬戸内海を見渡せる場所から景色を眺めたのだが、一瞬で通り過ぎたということもあり、ほとんど何も感じなかった。しかし歩いた時はそれまでの疲れや似たような景色が続いていたため、瀬戸内海が見渡せるその場所に立った時は、景色に深く感動し、体も心も軽くなったような気分になった。そこは絶景スポットと呼べるような所ではなくて、普通にただ海が見られるというだけの場所だったが、その時の私には絶景と呼べるほど、その景色が輝いて見えた。

バスの中で見る景色と歩きながら見る景色では、こんなにも感じ方に違いがあることに気付かされたが、それとともに、私は歩き遍路の良さは、自分だけの土地の魅力を発見できるという所にもあると思うようになった。普段何気なく通り過ぎてしまう場所でも、ゆっくり歩いて観察することによって、新たな発見があるかもしれない。それが例えどんなに些細なことだったとしても、その小さな発見がその土地の魅力の発見に繋がっていくのだと思う。その点で歩き遍路は、一つの観光手段としても非常に注目されるべき要素だと私は考える。

次に印象に残っているのは、様々な人や動物との出会いである。7 回行った小豆島遍路のうち、第 1 回と第 5 回は「ふれあい徒歩大巡行」という形で、学生だけでなく一般の人たちと一緒に遍路を行った。最初の大巡行は高齢の人が多かったように思えたが、次の大巡行は私と同じくらいの年齢の人や、子供の姿も見かけることができた。そのような人たちと一緒に遍路をしていると、遍路の苦しさや楽しさを共有しているように思えて、心強かった。また、ある札所で私がお経のどこを読んでいるか分からずにあたふたしていると、隣に同じ遍路をしているおじさんが来て、どこを読んでいるかを親切に教えてくれた。普段生活していて見ず知らずの人から親切にされたことなど、全くといっていいほど無かったので最初は少し戸惑ったが、非常に嬉しかった。また遍路をしていると、お接待というものも受けることができた。ある所では、飲み物を頂いたり、またある所ではうどんやお菓子などの食べ物を頂いたりした。そのどれもが私たちお遍路を気遣ってくれたもので、本当に有難かった。それによって肉体的な疲れが取れるのはもちろんのこと、人の温かさに触れる度に、精神的な疲れまで癒された。その意味でお接待というものは、他のどんなものよりも効果のある栄養剤のように思える。一人で遍路をしている者にとっては、特にそう思えるのではないだろうか。お接待を通して人と触れ合うことは、遍路をするうえで非常に大きな支えになっていると私は思う。

緑豊かな小豆島では、人だけでなく様々な動物とも出会うことができた。その中で一番印象に残っているのは、猿との出会いである。今まで猿といえば、動物園でしか見た事がなかったので、初めて野生の猿を見た時は非常に驚いた。テレビでよく猿が観光客を襲っ

ているのを見ていたので、自分も襲われるのではないかと思っていた。しかし小豆島の猿はおとなしいのか、それとも人間に慣れているのかはわからないが、こちらの方を向くだけで、襲ってきたり逃げ出したりするということにはなかった。それが分かった途端、私は安堵するとともに、猿ののんびりとした様子を見て微笑ましくなった。思いもよらぬ場所で思いがけないものと出会う。これもまた、歩き遍路の良さの一つだと私は思う。

歩き遍路をしていると、道がわからなくなったり、足腰が痛んで非常に疲れたりといった、とても大変な思いをしなければならない。しかしそれと同時に歩き遍路には、人や動物たち、素晴らしい景色や自然の神秘などとの様々な出会いもある。乗り物を使って遍路をしていても、そういったものに出会えない訳ではないが、前にも述べたように、乗り物を使った遍路と歩き遍路では、感じ方というものが全く変わってくる。なので、歩き遍路の方がより深くそのような出会いに感動することができるはずである。また、私は歩き遍路というものは「人生」を表しているのではないかと思う。人生においても自分の道に迷うことはあるし、歩き疲れて休みたくなる時もある。そしていろいろな人や自然との出会いがある。少し寄り道をすれば、そこには新たな出会いや発見があるかもしれない。そしてそういった出会いや発見をする度に、今までの苦しみはこれに出会うためにあったのだと思えるようになると私は考える。苦しさというのは、その後の喜びを何倍にもしてくれるもの。私は歩き遍路をすることで、そう思えるようになった。

少し話が逸れた気がするが、歩き遍路には人生も含めて、様々な事を考えさせられるようなものが詰まっていると思う。だからこそ、交通が便利になった今でも歩き遍路が根強く残っているのだろう。私は歩いている時は、実際に人生や歩き遍路の魅力について考える余裕はなかったが、今こうしてその時を思い返してみると、今まで気づかなかったことに気づかされた。まだ小豆島遍路は残っているが、あと残り少ない遍路で自分なりの出会いや発見をして、もっと小豆島や歩き遍路の魅力を感じていきたいと思う。

(宮内崇匡 (香川大学経済学部学生))



図 7 2009 年 11 月 29 日 第 8 コースにて

おわりに

観光とは「国の光りを観る」ことだと言われる。四国・瀬戸内圏で光りと言え、いぶし銀かもしれないが、お遍路を第一にあげることができよう。お遍路を世界遺産にという運動もある。「世界遺産にふさわしいものがあるとすれば、それはお接待でしょう」と言うお遍路さんがいた。お遍路をした人がいちばん驚くのは、見ず知らずの人からお接待されることではないかと思う。そのような美しい文化がこの地域に残っているのはすばらしいことである。また、お遍路をしながら小豆島の海岸や山岳霊場から見る瀬戸内海の美しさ。これは何度見ても飽きることのない絶景である。しかしながら、このような歩きの時代の文化や美意識が、車社会になってだんだん失われていくことも危惧される。

この一年、ゼミ生諸君とともに小豆島を歩き、たくさんの島の・瀬戸内の魅力を再発見できたのはよい経験だった。自分自身を振り返ると、二十数年間、四国高松に住みながら、お遍路をしてみようという気持ちになったのは、ほんの数年前のことであった。筆者は、老境に近づいて初めてお遍路のすばらしさに気付いたわけである。そのような人間が若者にお遍路の魅力を説く資格はないのであるが、無理を言って歩き遍路に付き合ってもらった。まだディズニーランドで楽しみたい年頃の学生諸君が、どんな風にお遍路を経験するのか、興味津々だった。筆者にとっては、学生諸君が苦労して歩いた経験を書してくれた「お遍路体験記」がこの一年の最大の収穫だった。

(大賀睦夫 (香川大学経済学部教授))